

第五章 四十五歳の多感

1

萌黄がまどろみの中で最初の寝返りを打った頃――。

ひとりの男が、左足を引きずるようにして夜の街をトボトボ歩いていった。

午前一時。夜の人間たちにとってはまだまだ宵の口という時間。しかし今夜の池袋は、いつもとどこか違う表情を呈していた。人通り――というより賑やかさが微塵も感じられない。

（どいつもこいつも、肝だめし大会で墓場に踏み込んだみたいに、オドオドした眼をしてやがる）

ならばさしずめビル群は墓石か。呟きながら男は立ち止まり、向こう脛をさすってみた。若干うずくものの痛みはかなり薄らいでいた。ズボンをめくってみても内出血している様子はない。ホッと安心する。

（それにしても、あの騒ぎは何だったのか……）
再び歩き出す。

男は一時間前の出来事を思い返した。

男の名は雛田義史。^{ひなたよしふみ} 四十五歳。

午後十一時を回ってようやく仕事から解放された雛田は、くたびれた背広に包まれたくたびれた身体を引きずるようにしてJR渋谷駅の改札をくぐると、発車間際の電車に駆け込んだ。

車内はそこそこ混み合っていた。雛田は扉の脇の手すりによりかかると、ふうと息を吐いて目を閉じた。

（下手すると睡魔に負けちまいそうだ。まだ一用事あるというのに）

しかし電車が走り出すや、すぐそばで上がったたたましい笑い声に眠気を吹き飛ばされた。

笑い声はこの世のものとも思えぬ醜悪さを帯びていた。と入れ替わって今度は別のキンキン声が下手クソな歌を歌い始めた。

（チッ、またP A I^{パイ}か）

雛田は流し目で騒音源を睨みつけた。同じく乗り合わせたサラリーマンたちも渋い顔で視線を注いでいる。

騒音源は、遊び帰りらしい若者たちが拡げている携帯電話だった。それぞれの液晶画面から飛び出したP A Iたちが、口々に雄叫びをあげ、歌っていたのだ。

公共マナーはもはや過去の遺物なのだろうか。P A Iが一大ブームとなり、一般的なデジタルペットとして定

着してから早や数年。『車内ではP A Iを起動しないように』という警句も連中にとつてはどこ吹く風だ。

一昔前の携帯メールは静かな分まだ良かった。今やどこへ行つても、P A I、P A I、P A I。日々流れるニュースでは新バージョンのP A Iの紹介は欠かせない。ショッピングモールはどのフロアにもP A Iステーションがあり、新種のアイテム入荷の文字が人々の購買欲をさらにかき立てる。最近では子供や若者ばかりでなく、中高年層にまでユーザー層は広がっている。

以前、自宅そばの公園で見た光景が思い出される。顔見知りの老紳士がベンチに腰掛け、携帯に向かって熱心に話しているのを見かけたが、そのP A Iを見て仰天した。P A Iは老紳士の亡き妻だったのだ。

ふたりの会話は長年連れ添った老夫婦のそれだった。

「そうでしたわね」「そんなことありませんよ」などP A Iは相づちを打つばかりなのだが、仕草や声色を亡妻に似せてチューンアップしているらしい。老紳士は愛おしむように両手で携帯を包んでいた。

最近、身内の死を受け入れられない人を対象にした、新たなP A Iビジネスが注目を集めている。だがそんなビジネスが人を豊かにしているのかどうか。

見ていた雛田は、やがてもの悲しくなり、そそくさと

その場を離れた。

PAIの利点をすべて否定するつもりはない。しかし何ごとにもいい面があれば悪い面がある。PAIの登場で公共の場と私的な空間の境界がますます曖昧になってしまったことは事実だろう。

新宿を過ぎて、PAIどもの狂乱ぶりはますます度を深めていた。PAIどもはアニメキャラの女の子だったり、特撮ヒーローだったり、あるいはグシャグシャとした妖怪だったり千差万別だ。それらが口々に叫んだり歌といえない歌声を披露したりするものだから、思わず耳を覆いたくなる。中には隣り客に火を吹きかけるヤツもいる始末。

それでも雛田は諫める^{いさ}気は毛頭なかった。そんな恐ろしいことはもつてのほか。気弱な雛田にとっては埒外^{うちがい}の選択肢である。乗り合わせたサラリーマンたちが黙っているのも同じ理由からだろう。

若年者人口が減り始めてこのかた、「子供は宝」と甘やかして育った若者たちの傍若無人ぶりは十年前の比ではない。大騒ぎする、ひったくりはする、煙草は吸うで、もはや手がつけられない。おかげで女性客の姿がなくなり、女性専用車輦も消えてしまった。

雛田もできればこんな時間帯に山手線を利用したくはなかった。

目白を出た辺りで、ガラスの割れる音が鳴り響いた。

雛田も周囲の乗客たちもギョツとして振り向いたが、ガラスはどこも割れた様子はない。リーダー格とおぼしき長身の若者がニヤついているだけだった。

「へへへ、だまされてやんの」

PAIの仕業だったのだ。彼の手許では有名格闘家を持ち力かチュアしたPAIが、両手に割れたガラスを持って高笑いしている。眉をひそめる周囲の大人たちをよそに、若者は悪びれたふうもなく、友人たちの話の輪に帰っていく。

そのとき、若者たちの向かいの席の老人男性が「ううう」とうめきながら前屈みになり、そのまま床に転がり落ちた。

雛田はすかさず駆け寄ると、老人を助け起こした。

「大丈夫ですか？」

「……し……心臓が」

ガラスの割れる音が老人の心臓を直撃したのだ。雛田は怒りがこみ上げてくるのを感じた。

周囲の乗客と協力して、老人を座席に横たえさせると雛田は若者たちをキツと睨み据えた。緊張で身体中から

汗が噴き出すのがわかる。だが、もはや我慢の限界だ。

「お、お前ら、い、いい加減にしろ！」

2

同じ車輻に乗り合わせた者たち全員が、首を長くして待ちかねた言葉、それがついにほとぼしり出た。

彼らは、この瞬間、大いに溜飲を下げたことだろう。

快感を得たことだろう。

ただし……。

続いて訪れるはずの重苦しい数分ないしは数十分が頭をよぎれば、快感の温もりはいとも簡単に冷えてしまう。言葉を発した者は、人身御供として此岸に取り残され、言葉を発しなかった者は、あわてて川に飛び込み、彼岸へと必死に泳ぎ、逃亡を試みる。

雛田は、言葉を——発しなかった。

雛田が発するつもりだった言葉は、隣りに突如現れた七十代と思しき男性の口から、わずかコンマ一秒だけ早く発せられたのだった。

台詞を取られて、雛田は呆然と隣りの男を観察した。

男は三つ揃いの背広をきつちりと着用し、わずかに

曲がった腰を支えるため、右手にステツキを持っていた。白髪はきれいに撫でつけられ、口ひげは形よく整えられている。小柄で引き締まった体付きはどこか軍人を連想させるところがあり、逆八の字の太い眉やその下で鋭い光を発する眼は、高地に攻めてきた敵を前にして、「てーっ」と叫びそうな予感を抱かせた。

雛田は男の風貌から陸軍大将乃木希典のぎまれすけを連想した。

まさに“大将”は、若者たちを前にして宣戦布告したのだ。

しかし若者たちはそうは受け取らなかった。

「おじいちゃん、そんなに顔を真っ赤にすると、あつちのおじいちゃんみたいに倒れちゃうよ」

彼のP A Iがヌンチャクを振って威嚇する。

「黙れ！」

大将は、股を拡げてヘラヘラ笑いを浮かべる若者たちを前に、威厳に満ちた低い声で恫喝した。

雛田は、大将は次に訓辞を始めるに違いない、そう見ていたが、大将はまったく予期せぬ行動に出た。ステツキを持ち上げると、左手で真ん中辺りを握り、スライドさせたのだ。

そこには刀が仕込ませてあった。

まるで映画だ。座頭市だ。勝新太郎には似ても似つかないが。

若者たちはさすがに驚いたようだ。しかしリーダー格は仲間の手前、逃げるわけにも行かない。虚勢を張ってへらへら笑いを続けている。

大将はP A Iの向こうに若者の顔を見おろしながら、「お前たちを探すのに苦労した。覚えておるか。先週、渋谷でお前たちに因縁を付けられ、大怪我をさせられたワシの孫を」

「アハハ、そんな昔のこと言われても、ボクちゃん生まれてないし」

冗談のつもりだろうが雛田には笑えない。

「……お前たちにワシの言葉は通じまい。ならば身体で思い知るべし」

それだけ言うとは大将は前傾姿勢になり、リーダー格の胸に飛び込んでいった。リーダー格は足払いを浴びせようとしたが、不意をついた分、大将のほうが早かった。

「ナニすんだよ！」

リーダー格に突き飛ばされて、大将は床の上に転がった。しかしステッキの先端は、リーダー格の腹にしっかりと突き刺さっていた。

「クソ、いてーじゃんかよー」

リーダー格は力まかせにステッキを引き抜いた。刺された辺りのTシャツが見る見る真っ赤に染まっていく。

「うわっ——何なんだこりゃ——ゲフツ」

彼は遠い目を見ると、床の上に大の字になって倒れた。車内は乗客たちの悲鳴で充満した。男性ばかりだった
が。

「アニキ！」

子分格の若者たちがリーダー格のそばに屈み込む。しかし彼らのアニキはピクリともしない。即死に近いのではないか。雛田はそう思った。

「な、なんだコレ？」

「ひいひい」

怯えるような声をあげて、子分どもが一斉に腰を引いた。彼らは一様に目を見開き、アワアワと震えていた。

雛田も彼らの視線の先を見て絶句した。

倒れたリーダー格の身体が土気色に変わっていたのだ。そして電車の揺れに合わせるように土気色の身体がボロボロと崩れていく。

（どういふことだ、変わり身の術か？）

見守っているうちにリーダー格の砂像はどんどん崩れ、アツという間に“人型に蒔かれた砂”になってしまった。
「ハッハッハッハッハ」

大将の哄笑が耳を打つ。

「奴め、人ではないとは思っていたが、やはり人ではなかったわ。ワシが殺したのは人間ではない。ワシは殺人

犯ではないぞ！」

そうなのか？ リーダー格はエイリアン？

雛田の頭は混乱した。

「どれ、他の連中も退治せねばならん」

大將は再びステッキを取り上げ、子分どもに近づいていった。その顔には悪魔的な笑いが浮かんでいる。

「ひいい、助けてくれ！」

最も近くで無防備な胸をさらしていた一人が、二番目の犠牲者になった。大將がステッキを引き抜くと、子分の身体は刃を受けた箇所から砂に変貌していった。わずかに数秒で腕が付け根からすべり落ち、次の数秒で頭部が床の上で四散した。

「妖怪どもめ、この世から消えてなくなれい！」

大將のステッキは執拗に子分たちを追っていく。腰を抜かした彼らは逃げることもできず、次々と始末され、砂になっていく。

そのとき、電車はようやく池袋駅に到着した。扉が開くや、恐怖に駆られた乗客たちが一斉にホームに逃げ出した。雛田も出口に向かって駆け出したが、誰かに突き飛ばされ、向こう脛をイヤというほど柱に打ち付けてしまった。

しばらくは歩くことができず、駅構内に隠れていたが、やがてパトカーと救急車の音が聞こえてくると、面倒は

ごめんとばかり、裏の方にまわり、やつとのことで逃げ出すのに成功した。

（砂になった若者たちは、本当にエイリアンだったのだろうか……）

雛田の脳裏に、砂になった若者の顔がよみがえった。今頃になって身震いするような恐怖が込み上げてくる。（とにかく急がねば。あんまり待ちぼうけをくらわせると相棒が痼癢を起こすぞ）

雛田は寂しい夜の街を、足をさすりながら歩いていった。

3

昼間、あれほど強かった日差しが嘘のように、雛田の両脇を冷たい風が吹き過ぎていく。晩夏というより初秋だ。思わず身震いしながら、着古した一張羅の背広の襟を立てた。

歩を運ぶ雛田の足音が、異様なほど街に響く。さつきまではちらほら見かけた通行人の姿はどこにもない。立ち止まって耳を澄ましてみる。すると東京とは思えない静けさが迫ってきた。

どこか遠くを走る救急車のサイレンが、街の輪郭を浮

き上がらせる。

彼は戦慄を覚えた。

ひよっとすると自分の佇んでいるのは、鯨の背中ではないだろうか。夜の大海原で水面に巨体を浮かべて眠っている鯨の。遙か遠くではサイレンを付けた鯨が波をけたてて遊弋ゆうよくしている。

雛田は自分で自分の想像に恐怖を感じた。彼の足はいつしか痛みを忘れて小走りになっていた。

目的地に到着したとき、雛田はホッとせずにはいられなかった。

目の前の小振りなテナントビルを見上げる。年季の入った外観はさすがに夜は見えない。彼の会社が構える事務所は三階の角にあるのだが、すでに消灯されていた。相棒はどうやら“店”の方にいるらしい。

雛田はビルの正面玄関を通り過ぎると、すり減った石の階段を下りていった。“店”とはビルの地下にあるバーのことで、ビルが建てられた頃から変わらず同じ場所にある。

重たいオーク材の扉を開くと、間髪入れずにキーの高い声が彼の耳に飛び込んできた。

「これはこれは雛田会長。ごゆるりとしたお出ましですな。わたくし社長の影松かげまつ、だらしないことに貴方様を待

ちきれず、酒に手が伸びてしまいました。どうかこのわたくしめをクビにしてやってください」

止まり木に座ったまま彼を迎えた男は、両手を握りしめて雛田に許しを請うてみせた。雛田は顔をしかめつつ頭を下げた。

「申し訳ありません。アイドルたちを自宅に送っていく途中で、ひとりが買い物したいと駄々をこねたものですから。そのうえ山手線で――」

「なるほど会長おん自ら、ウチの所属タレントのわがままのお相手をされていたのですな。これは私も見習わねばなりません」

「勘弁してくださいよ」たまらず雛田は悲鳴を上げた。

「私は吹けば飛ぶような一介の平社員です。言い訳などしてまことに済みませんでした。社長をお待たせしたことも反省しております。どうかお許しください」

「本気で受け答えるな。雛田ともあろう者が」

影松は止まり木に腰掛けたまま、グラスの中の酒をぐいとあおると、雛田に横に腰掛けるよう無言で示した。

「今夜呼び出したのは、俺の個人的な用事なんだ。仕事じゃあない。頼まれてくれるな？」

もとより雛田は否やを言える立場ではない。影松の頼みはイコール至上命令である。影松は雛田が頷くのを見もせずにバーテンに顔を向けると、こいつに何か食うも

のをやってくれ、クラブサンドイッチがいいと勝手に注文した。

雛田はおずおずと影松の隣に座った。

客はふたりのほかに、奥まったテーブルに三人連れの男性客がいるだけだ。いつもより店内が静かなのはそのせいもあるらしい。店内は決して広くはないが、流れてくるジャズピアノ（アナログ盤のレコードである）のせいで互いの声は聞こえない。もっともこのバーの常連に、大声を出すような人間はいない。たまたまそんな人間が闖入してきても、すぐ淘汰されてしまう。このバーはそんな雰囲気を持っている。だから影松も雛田もここが好きだし、午後五時以降の打ち合わせなどに使うこともたびたびある。だいいち最初に惚れ込んだのは影松で、三年前、同じビルに事務所を移転させたのも彼の思慕の情が昂じたためである。

確かにいい酒を出す。ちよつとした食べ物も提供してくれる。初老で伏せ目がちのバーテンと、彼の息子だという若い店員はふたりとも寡黙で、完全にバーに埋没していると言うべきか一体化していると言うべきか。

サンドイッチはあらかじめ用意されていたかのように、すぐに出てきた。夕食を取る暇もなかった雛田は待ちかねたとばかりに手を伸ばす。

「酒は飲まないでくれよ。頼みというのは今夜、俺の運

転手になつてほしいということなんだ」

「でも車は渋谷で、交代のマネージャーに渡しました
が」

「知っている。まあ話はそれを食い終わってからにしよ
う」

影松はそう言うと、バーテンにコーヒーを注文した。

雛田に飲ませるつもりらしい。どうやら行き先は近所で
はなさそうだ。

雛田はふと思う。奥にいる三人連れの客のひとりとは結
構な年配らしい男が混じっている。もし彼がこちらに目
を向けたらこう言うかもしれない。

「あの有名なコメディアン、カゲヒナタのおふたりです
よね？ 再結成の相談でもしてるんですか？」

4

カゲヒナタ。

影松ゆたか豊と雛田義史はかつてこの名前でコンビを組み、

コメディアンとして一世を風靡した。果てしなく脱線を
繰り返す雛田のボケに、毒舌の影松が激しくツツコミ
を入れまくる。そのスタイルが大いに受け、ふたりはデ
ビューするや各種コンテストを総なめにし、アツと言う
間にスターダムへと登りつめた。

その結果、仕事の数は極限にまで増えていき、ふたりは秒刻みでテレビ局をハシゴし、スタジオからスタジオへ、ステージからステージへと駆け巡ることになった。

高額ギャラが彼らの目の前に現れては背後へと消えていった。遊ぶ時間はおろか寝る時間さえないふたりには、やがて金の流れも遠くかすんで見えなくなった。

ふたりはへとへとになりながらも、毎日タフに仕事をこなしていった。つらい時は互いに励まし合った。彼らは同じ年で幼友達だったから、相棒だけが唯一の心のよりどころだった。

雛田は回想を中断すると、サンドイッチを持ったまま、視線を影松へと転じた。

「——ウチのイチオシの新人なんだよ。なんとかオタクの新番組に使ってやってよ、頼むからさあ。ウン、ウン、そうか、恩に着るよ」

影松はグラス片手に携帯画面に映る相手と話している。そして一通話が終わるとすぐまた別のところにかける。じつにせわしない。

「——なあ、お前んところのディレクター、何だよアレは。ウチのタレントを潰すつもりか？ 上に伝えろ。次までに頭をすげ替えとけてな。さもないとオタクから全面的に手を引くぞってな。以上」

気の弱そうな相手の顔が画面から霧のように消える。

影松は携帯をカウンターに置きながら、まったく誰に食わせてもらってんだと宙に向かって毒付く。雛田にとって見慣れた風景だ。

カゲヒナタはデビューから十五年で芸能生活に終止符を打った。理由は人気に翳^{かげ}りが出たからでもスキャンダルに巻き込まれたからでもない。雛田が耐えられなくなったせいである。

スケジュールがハードなのはまだいい。そしてステージでコントをやっている間は。問題なのはバラエティ番組だ。自分たちの冠番組だろうがゲスト出演だろうが、やりたくないことをやらされ、口にしたくもない言葉を強要される。

自虐ネタならまだいい。そうではなく、他の誰かをおとしめたり辱めたりするのに我慢ならなくなったのだ。

雛田はとうとう、ある番組の収録中にキレてしまった。所属する会社の先輩司会者に噛みついたのだ。

周囲は穏便に済まそうと懸命に取りなしてくれたが、雛田は謝罪しなかった。自分はまちがっていない。あんな笑いを提供するぐらいならさっさと足を洗ってやる。すでに三十代半ばだったが、若気の至りといってもいい。いま思い返せば多少の驕^{おご}りも手伝ったかもしれない。

いずれにせよ、雛田は芸能界から干され、その日から生活に困窮することになった。あれほど稼いだ金はどこ

か知らないところに消えてなくなった。住んでいた高級マンションも追い出され、一転して路頭に迷う羽目に陥ったのだ。

家族もおらず、故郷に帰る家もない雛田を救ったのは、誰でもない、相棒の影松だった。

「俺もいい加減、お笑いやってるのに飽き飽きしてたんだ。こんど独立してプロダクション作ることにしたからウチで働けよ」

雛田は相棒の言葉に涙を流した。とはいえさすがに周囲の目もあり、重役に据えることはできない。雛田は一介のマネージャーから再スタートを切ることになった。

一線から退いた雛田を最も驚かせたのは、それまで見せたことのない相棒の姿だった。影松は、いつの間に築いていたのか、多方面にわたる人脈を駆使すると、自身の芸能プロを短期間のうちに誰も見過ごせない、一大勢力を持つ会社に急成長させたのだ。

陽の当たらない有能タレントを引き抜く。無名の新人は自ら足を運んで発掘する。そして適材適所の番組派遣を自らの責任でおこなった。それらはすべて意外性に満ち、たちまち相棒の会社は業界とお茶の間の話題を独占した。

雛田は今さらながら幼なじみの隠れた才能に舌を巻かずにいられなかった。相棒は生まれながらのプロデュー

サーだったのだ。

——あれから早や五年。

すっかり社長の貫禄を身につけた相棒とは逆に、雛田はタレントたちのマネージャーとして、日夜彼らの送迎とスケジュール管理に追われている。相棒を社長として立てることにしようやく慣れた。

その相棒は隣で携帯に向かって役立たずと怒鳴ると、パチンと通話を切り、雛田の方に向き直った。

「まったく今の若い連中は義務教育を受けてるのかねえ。この国の将来を案じずにはいられんよ」

「はあ」と雛田は背中を丸めるながら相づちを打つ。

「ところでお前さつき、山手線がどうか言ってなかったか？」

「……覚えてたんですか？」

「俺を誰だと思ってるんだ。物覚えの悪い政治家といっしよにするな」

「すいません。……その、山手線の車内で殺人事件があつたんですよ」

「殺人だとお？」声が裏返った。「面白そうな話じゃないか。もったいぶらずに話せ」

「ハ、ハイ」雛田は口の中のサンドイッチをコーヒード流し込むと言葉を続けた。

「その、暴れていたアンディ・フグ選手の前に、乃木大

将が現れまして、いきなり座頭市に変身したと思ったら、仕込み杖で一刀両断。退治されたアンディ・フグは砂になつて――」

「コラコラ、こんなところで十八番の脱線芸を披露するな」影松は顔をしかめる。「想像力だけは俺の百倍あるくせに、まったく宝の持ち腐れだぜ」

5

雛田は電車の中で遭遇した奇妙な事件について、影松に細かく語つて聞かせた。影松は途中で言葉をはさむことなく、最後まで静かに耳を傾けていた。口数の多い影松が聞き役に徹するのは珍しいことである。というのも雛田の場合、下手に合いの手を入れたが最後、話がどんな横道に逸れていく可能性があるからだ。長年の付き合いで相手の性格は知り抜いている。

話しながらその時の情景を思い出したのだろう。雛田は額に浮かぶ汗を何度も二の腕でぬぐいながら、それでも彼にしては要領よく話をまとめた。

聞き終えて、影松は開口一番こう訊ねた。

「なんでそのじいさんが乃木大将なんだ？」

「イメージがピッタリだったんですよ。昔、ロケで京都に行つたとき神社で見た銅像にそっくりで」

「他にたえようがないのか？ 乃木大将といえは戦国時代の武将だろ？」

「いいえ、幕末の戊辰戦争で勲功のあった人でしょ？」

「……日露戦争」

ぼそつと漏れたような声がカウンター越しに聞こえてきた。顔を向けると、タンブラーを拭う手を休めたバーテンの息子がそこにいた。

「ホント？」と雛田。

「はい……すみません。口をはさんで」バーテンの息子は礼儀正しく頭を下げて詫げる。

「若いのに物知りなんだね。ところで二チ口っていうと、戦った相手はローマ？」

バーテンの息子が何か答えようとするのを、影松が掌を上げて制した。

「答えなくていい。そうやってだんだん話がズれていくんだよ。いつものパターンじゃないか。……そんなことよりお前の話のラストの方が気になるよ」

「私の怪我を気にしてくださるんですか？」

「バカ。刺された連中がことごとく砂になっちまったつてくだりだ」

「やっぱり」

影松は足を組むと、雛田に顔を近づけた。

「ひとつ教えてやろう。今日の夕方、成田で胴体着陸に

失敗した旅客機が炎上した事件、聞いてるか？」

「いえ、忙しかったもので」

「俺はお前の千倍忙しいんだよ。でな、火災が鎮静化してからレスキュー隊が機内に入ってみるとだな、そこには――」

「そこには？」ごくろり。

「だーれもいなかったんだとさ。乗客はおろか機長もフライトアテンダントも。生存者どころか遺体の影すら見あたらない」

「無人……」

「そうだ。代わりに、すっぽり脱ぎ捨てられた衣服ばかりが砂にまみれて散らばっていたと報告されている。どうだ、お前の話と似てるだろ？」

「え、ええ」雛田は身震いした。

「ただ表向きの発表は全員死亡ということになっている。火災がひどくて骨すら燃え残らなかったとな」

「じゃあなぜ社長は事実をご存知なので？」

「俺だからだよ」

「……でも、どうしてそんな嘘の公表なんか」

「しょうがないだろ。国がストップかけてるんだ。まあ表沙汰になるのは時間の問題だろうがな」

「そうですよね。山手線でもあれだけ大騒ぎになったんですから」

「そんなこんなで」影松は空になったグラスを上げて、バーテンにお代わりを求めた。「マスコミはどこもかしこもてんやわんやだよ。いろんな情報が錯綜しててな。機内に新種の細菌兵器がバラまかれたなんて噂もある」

「細菌兵器……」

「お前、その砂をかぶったりしたんじゃないのか？」

「少しは吸い込んだかも……」

「危ないな。今夜あたり身体がザーツと」

「ははは。脅かしっこなしですよ社長」

雛田がおどけたように言うと、影松は露骨に嫌な顔を見せた。しかし言いたいことを酒に混ぜて飲み込むと、そのまま話を続けた。

「これは確度の高い情報なんだが、重傷を負った人間の身体が砂粒になって崩れる現象っていうのが、いま世界各地で起きているらしい」

雛田は絶句した。電車で見た光景が眼前によみがえる。

「そんな……」

「そうだ、地球規模で同時多発テロが決行されたという、ちよつと非現実的な話だ。どこまでが真実でどこからがデマなのか判りやしない——だが今の俺にとっては、そんなのはどうでもいい話さ」

「そ、そうなんですか？」

おどおどと上目遣いに影松を見やる雛田。そんな元相

棒の姿に、影松は「オイ！」と怒鳴ると、カウンターを拳でドンと叩いた。

「いい加減にしろ雛田。お前は俺の元相棒だぞ。なんでいつもそう卑屈な物腰になる？ ふだんならいざ知らず、ふたりっきりの時まで敬語なんか使うなど言ってるだろ。必要以上にへこへこしやがって、元相棒の俺の値打ちまで下がっちゃう」

「その……いや……あの……はい」

雛田は小刻みに頷きながら背中を丸めていった。影松はさらに二言三言たたみかけようとしたが、元相棒の薄くなった頭頂が目に入ると、それ以上何も言えなくなってしまった。

影松はエスプレッソをふたつ追加注文した。

無口のバーテンがふたりの前にカップを置く。カチャリという音が絶妙の合いの手のように響き、雛田の肩の力をいくぶん緩めさせた。

飲めよと促す影松に、雛田もカップに手を伸ばす。

「俺が免許を持ってるや、お前を煩わせることもなかったんだが——。長距離の運転になるから、すまないがそれ飲んできっちり目を覚ましといてくれ」

「……行き先はどちらで？」

「娘のところだ」

「清香ちゃんの？」

影松はエスプレッソを一口すすると、その口許を曲げながら、

「当たり前じゃないか。俺に娘はひとりしかいないよ」

「ああ、まあ知って……るけど、こんな真夜中に彼女を訪問するのかい？」

「さつき十時過ぎにメールが届いたんだ」

影松は上着の胸ポケットから携帯を取り出した。

「PAIを変えた？」と雛田。

「ん？ ああ、前のに飽きたんでな」

ピンクのカバが液晶画面から顔を覗かせている。ふかふかの縫いぐるみのような小さなカバだ。毛並みが濃いためか、小さな黒目がしよぼついて見える。影松はそのカバに向かって、清香のメールを出せと命令した。カバはフーンと頼りなげな声で応じると、画面の中に後退し、代わりに一通のメールを浮き上がらせた。

お父さん、清香です。

とても困ったことが起こりました。すぐ私のところに来てほしいのです。何時になってもかまいません。

わがままなお願いでごめんなさい。

「これだけかい？ 困ったことっていったい何なんだ」

雛田は身を乗り出して訊ねた。

「俺にも判らんよ。電話をかけても通じないしな」影松はパタツと携帯を閉じた。「だからこちらから会いにくしかないんだ」

「だったら悠長に構えている暇はないだろう。すぐ出発しよう」

雛田は腰を浮かせた。それを見て影松は苦笑を漏らす。

「ハハハ。親父の俺より心配してくれるじゃないか」

「な、何をバカなことを言ってるんだ。お前だって気がかりじゃないのか？」

雛田は自分の顔が赤くなるのを感じながらも、言い返さずにいられなかった。

「俺をお前と呼んでくれたな。ようやく往年の名コンビ、復活の兆しが見えてきたぞ。いやすまん。からかうつもりはない。もちろん娘のことは心配だ。だから運転手としてお前に白羽の矢を立てたんだ。なぜなら娘の立場もあるし、第三者に頼んで娘の難儀がマスコミに漏れでもしたら、場合によっては大変だからな」

「なるほど」

「それに雛田、お前、ときどき清香の相談相手になってくれてるそうじゃないか」

「まあその……たまにな」

「お前が同行してくれると俺も心強い。清香も喜ぶだろう。」

お前も知つてのとおり、清香にとって俺はお世辞にもいい親父とは言えない。小さい頃はカゲヒナタの営業が多忙を極めたせいで、遊園地へ遊びに連れて行ってやるどころか、顔を見る暇もろくにない有様だった。小学校の卒業式、たまたま時間が空いたので駆けつけてみたら……笑っちゃったよ。どれが自分の娘だか判らなかったんだからな。

芸人生活から足を洗い、会社を興してプロデューサー業に徹し始めると、ますます家族とは疎遠になった。俺はシビアな人間だから敵も多い。知らないところで根も葉もない噂をバラまかれることもたびたびあった。そのすべてが嘘だとは言わないがな。まあそうなると俺だって家族に迷惑をかけたくないから、ますます距離を置きたくなる。……言い訳がましいかな。ハハハ」

「笑ってる場合じゃないだろう？ なあカゲ。話は道々聞くから、急いだ方がいいんじゃないか？」

「そうだな、うん」

芸能界では強面こわもての影松が、相棒に個人的な用を頼むことに多少は抵抗、もしくはテレがあるのかもしれない。ようやく重い腰を上げた彼は、ここは俺が持つからと、

ふたり分の勘定を支払った。そしてバーテン親子に軽く手を振ると、階段を駆け上がって地上に出た。

「レンタカーを用意してある。こっちだ」

社の専用駐車場に行ってみると、そこには街灯に照らされた四駆がぽつんと置かれていた。ふたりは乗り込み、雛田がエンジンを始動させる。

「えらく車高の高い車を借りたんだな」

「だって行き先は軽井沢の奥だっていうじゃないか。これくらい必要かと思ってな」

「行ったことはないのか？」

「ないよ」

四駆はうなりを上げて駐車場を出ると、国道に向けて走り出した。

ハンドル脇の液晶パネルが午前二時半を示している。目的地への到着は朝方になるだろう。

影松は自分の携帯をダッシュボードのコネクタに接続すると、液晶画面に先ほどのカバを呼び出した。

「おい、軽井沢までのナビを命じる。しっかりやれ」

カバは鳴き声ともため息ともつかない声で返事した。

7

四駆は夜の高速道路をひた走る。

並走する車はなく、対向車ともめつたに出会わない高速道路はひどく現実感に乏しく、雛田は自分がまるでC Gかゲームの中にいるような気分がした。

影松がセカンドバッグから一枚のCDを取り出し、プレーヤーに挿入した。スピーカーから躍動感にあふれたラテンのリズムが流れ出す。壮大なアレンジをバックに、跳ねるような弦の響きが華麗に登場する。

「清香ちゃんの最新アルバムかい？」

「ああ、先月発売されたばかりだ」

訊ねるまでもなく雛田は知っていた。なぜなら清香自身が発売日前に雛田に送ってくれていたからだ。彼はタレント送迎の車中で毎日のように聴いていた。

影松清香は、いまや押しも押されぬ売れっ子ミュージシャンである。CDの売り上げは常にクラシック部門で三位以内をキープし、コンサート会場はどこも満杯だ。雛田も一度だけ行ったことがある。広いステージの上でオーケストラをバックに、自分の身体よりも大きな楽器“アルパ”を抱えるように演奏する姿に、思わず見とれてしまったものだ。

「彼女はいま何歳になるんだっけ？」

「二十三だ。……いや違う、二十二か」影松はあわてて言い直した。「おのれの娘の年齢を間違えるなんて、つくづくダメな親父だな俺は」

「まったく、あんな素晴らしい娘を持っていちゃ、何を言っても自慢にしか聞こえないよ」

曲はバラードに変わった。ギターとのアンサンブルが美しい。

「フン、どうせお前も“トンビが鷹を生んだ”って言いainだろう？」

「カゲが生んだわけじゃない」

「そりやそうだ。ハハハハハ」

つられて雛田も笑う。

「そういえば、碧さん^{みどり}は達者かい？」

碧は、清香の母親にして影松豊の妻である。

碧のことを思い出すと雛田の胸は苦しくなる。かつて雛田と碧は恋仲だった。ささいなことで仲違いし、分かれるに至ったが、数年後、彼女は影松と結婚した。もうずいぶん昔の話だ。

「相変わらず元気だよ。ずっと演奏旅行に出たつきりで、今頃はロンドンだかパリだか」

清香の母親は有名なピアニストで、清香にアルパを紹介したのは彼女だった。

「いつの間にか親子三人バラバラになっちゃった」影松が窓外の暗闇に目をやりながら、独り言のように呟く。

「それでも清香と母親の仲がいいのは救いだが。ふたりは頻繁にメールのやりとりをしているらしい。俺だけ蚊

帳の外というわけだ」

「ずいぶん愚痴っぽいじゃないか。日頃のオレ様節はどうした？」

「今夜だけはどこにでもいる気弱な父親を演じていたいのさ」

四駆は高速道路を北西へと快調に進む。ここまで五台の車とすれ違ったが、どれも救急車かパトカーだった。縁起でもない。雛田は首を振った。

「そう謙遜したものでないだろう。娘から助けを乞うメールが来たんだから、頼りにされてるんだよ」

「そうなのかな。でもこの数年、向こうからメールが来たことなんか一度もなかったのに……。お前の方に連絡はなかったのか？」

「僕はメールアドレスも電話番号も知らないからね。ときどき手紙をもらうくらいさ」

それは本当だった。月に一、二通のやりとりが、ときどき“かどうかは議論の分かれるところだが。

清香にとって雛田は気のいいおじさんなのだろう。素直に父親に甘えられない気持ちや、雛田との交流で癒しているのかも知れない。逆に雛田こそ、かつての恋人の娘が手ずから書いてくれる手紙や彼女の奏でる音楽に、独り身の寂しさがどれほど癒されたことか。

空が白み始めた頃、長野の県境を越えた。

「大丈夫か？ 睡魔に襲われてないか？」

影松が訊ねた。声がわずかに緊張の色合いを含んでいた。軽井沢が近づくにつれ、娘に対する気がかりが膨らみ始めたようだ。

「大丈夫。ちつとも眠くない。エスプレッソの効果絶大だよ」

気がかりは雛田も同様だったが、あえて明るいついでで応答してやった。

「そいつは良かった。ここまでくれば到着まで一時間というところだろう。……おや、あれは？」

影松が道路の前方を指差した。雛田も気がついた。

夜明け前の仄暗い空気を背景に、そこだけ光がゆらゆらと蠢うごめいている。

「——火だ」

「料金所じゃないのか？ 燃えてるのは」

雛田は少しずつスピードを緩めていった。

8

雛田は十メートルほど手前で四駆を止めた。

それは確かに料金所だった。数年前、日本全国の料金所はすべてETC化されたが、最低ひとりの人員を配置

することが義務付けられている。

雛田はフロントウインドウ越しに観察したが、ブースの中には人がいそうな気配がなく、電灯すら灯っていない。

奇妙なのは通行レーンだ。数本あるレーンの前にはどれも、丸太を置いてあったり板を打ち付けてあったりして、通せんぼしてある。まるでバリケードだ。

おかしいことはまだある。手前に二台の車が横転しているのだ。四駆のライトに照らされて、どちらの車からも煙がたなびいているのが見える。

ちようどその間には、焚き火が威勢良く燃えていた。遠くから見えた明かりは、この火だったのだ。

「カゲ、どう思う？」

「……ここから先は通さない、と言いたいらしいな。誰かさんは」

「戻った方が良さそうだな」

「ああ。……ちよつと待て。出てきたぞ」

いつの間にか焚き火の前に人影が現れていた。男が五人。彼らは兵隊のように横並びに整列すると、ゆっくりとこちらに近づいてきた。手に手に棒切れやバールのようなものを持っている。

「どうやらお友達にはなりたくない連中のようだな——
エンジンは切るなよ。いつでも走り出せるようにしてお

け」

影松は言う、サイドウインドウを五センチほど下ろした。雛田はぐりとツバを飲み込む。

五人の内、ふたりが車の左右に廻った。残りの三人は前に立ち塞がっている。影松はつとめて明るい声で近寄ってきた男に話しかけた。

「何かあったんですか？」

二十代半ばと思しき男は、無言のまま車内を見渡していたが、やがて口を開くと、

「ここから先は通れない。戻れ」

ぞつとするような冷たい声で言い放った。

「すみません。家族が待つてるもので、急ぐんですよ。なんとか通してもらえませんかね？」

影松はざつくばらん口調で話し続ける。雛田は気がではない。自分の側の窓から覗き込む男が、身振りでエンジンを切れと言っているようだ。雛田はわざと首を傾げて判らないふりをした。

「ダメだ」

男の返事は変わらなかった。

「そうですか。じゃあ戻って下の道に行くことにしますよ」

「それもダメだ。長野に入る道はどこにもない」

エッ？ 雛田と影松は驚いて顔を見合わせた。

その時だった。ドンと大きな音が雛田を飛び上がらせた。前にいた連中のひとりが、持っていたバットでボンネットを叩いたのだ。焚き火に照らされたボンネットが無惨にもへこんでいる。

「帰れつつたら素直に帰れよ！」

「てめえらも病原菌を持ち込もうとしてるんだろ！」

「テロリストどもが！」

車の前に陣取った三人は、声からしてどうやら十代の少年のようだ。彼らは口々に悪態をつくど、持っていた獲物を振り回し始めた。

「判りました。引き返します」

影松の態度はあくまでも冷静だ。そして雛田に向かって後退するように指示した。雛田は震える手でギアをバックに入れると、ゆっくりアクセルを踏んだ。

車は徐々に男たちから離れていく。

影松がそのままの姿勢で雛田に話しかけた。

「——いいか。俺がゴーと言ったら、右側の転けてる車の向こうに突っ込め。それで、そのまま全速力で料金所を突っ切るんだ」

雛田は驚いて影松を見たが、彼は前を向いたまま不敵な笑いを唇の端に浮かべていた。

男たちと四駆との距離が十メートルほどに開いた。

「ゴーッ！」

否も応もない。雛田は反射的にギアをドライブに入れ、アクセルをベタ踏みした。

四駆は大きな咆哮をあげ、野獣のように前に向かって突進した。

男たちの何人かは、料金所につけて返そうと身体を反転させた時だった。影松はその瞬間を狙ったのだ。

男たちの反応がわずかに遅れた。

しかし、雛田と会話を交わしたリーダーと目される男は俊敏だった。彼はムササビのように跳躍すると、四駆の屋根めがけて、握ったバールを振り下ろした。

ガツンッ！

大きな金属音に雛田は首をすくめる。しかし怯んではいられない。アクセルを踏み続ける。四駆の鼻面が横転している車と道路の横壁の間に滑り込んだ。ガリガリガリ。ボディを擦る嫌な音に耳を覆いたくなる。それでも四駆のスピードは落ちない。さすがはカゲ。彼の読みどおり車一台の幅があったのだ。すり抜けると目の前に通行レーンがあった。しかしそこにもバリケードがある。

「一気に突っ切れ！」と影松が怒鳴った。雛田は身体を縮めて衝撃に備えると、猛スピードのままバリケードに突入した。

ドンッ！ ガシガシッ！

激しい衝撃が雛田を襲った。

尻がシートから浮き上がったと思うと、次の瞬間、ウインドウに額をガツンと打ち付けていた。

雛田は、意識がスーッと遠のいて行くのを感じた。

9

さざ波の音が鼓膜をくすぐり、内耳に深くしみ込んでいく。まるで貝殻を耳にあてた時のように。

——違う。

これは誰かの弾く生ピアノの音だ。

まるで眠り人が呼吸するように、寄せては返す、穏やかで滑らかな音符の流れは、ほど良い装飾音とも相まって、彼に春先の岸边を連想させた。

——この曲には聞き覚えがある。

眼前の靄がすーっと晴れていく。

最初に目についたのは、巨大なガラス越しに見える湖畔の風景だった。夕陽に照らされて、幾艘ものヨットが、うたた寝する水鳥のように静かに揺れている。

彼はガラスに囲まれた内側に視線を移す。鉄骨のアンクルに支えられた高い天井も、周囲を囲む壁面もすべてがガラスで構成されている。彼はこの場所に見覚えがあった。

ピアノの旋律は途切れることなく流れている。誘われ

るようにゆつくりと首をめぐらせると、ガラスハウスの中は、正装した大勢の紳士淑女で満ちていた。彼らがそれぞれに囲むテーブルには一流の料理とワインが供されていた。

そう、ここはホテルのオーブンテラスなのだ。

彼の視線がピアノをとらえた。

演奏しているのは――春山碧だ。

やっぱり、と彼は微笑んだ。

これは碧の初めてのディナーショーなのだ。

富士山頂で御来光を拝むという元旦放送の番組ロケでやってきた雛田は、収録を済ませると影松とは別行動をとり、この湖畔のホテルで骨休みをしていた。たまたま廊下を歩いていて耳にしたピアノに心を惹かれ、こっそり足を踏み入れたのが、運命の出会いとなった。

雛田は、優雅にピアノを弾く碧の姿に魅了された。

ディナー終了後、楽屋に彼女を訪ねたのも彼にとってはおく自然な流れだった。驚いたことに碧は彼を知っていた。デビューしたばかりで人気急上昇中のカゲヒナタの片割れとしての雛田を。

ふたりはすぐに恋に落ち、二ヶ月後には同棲生活を始めた。思えばあの頃が一番楽しかったな。

互いに仕事が増えるにつれ、想いや生活のすれ違いが度重なり、あとはお決まりの“破局”へ一直線だった。

雛田は苦い思いで当時を振り返り、唇を噛み締める。碧はパリへと去っていった。もう会うこともあるまいと思っていた。ところが……。

「俺、結婚しようと思うんだ」

数年後、影松が雛田に打ち明けた相手が、なんとその碧だった。彼女は極秘のうちに日本に帰ってきており、軽井沢に建設したプライベートスタジオを新たな拠点として活動を再開するのだという。

もちろん相棒の影松は、雛田と碧がかつて付き合っていたことを知っている。雛田が影松のバツの悪そうな顔を見たのは、後にも先にもその時だけだ。

「じつは、できちゃった婚だな」

雛田は戸惑いつつも、ふたりの門出を祝福した。

結婚式は身内だけでとり行われたが、今をときめく二大スターの結婚、しかも花嫁は身重ということで、マスコミ各社は式場のある軽井沢に殺到した。彼らパラッチをまくため、影松に変装した雛田は大いに本領を発揮し、彼らを翻弄せしめた。

雛田は目を細めて回想する。花嫁衣装で着飾った碧は、臨月のお腹を抱えてますます神々しい美しさを放っていた。彼女は「またあなたに会えてよかった」と言った。

雛田はその言葉だけで十分だと思った。

数年後、再び碧と会ったとき、彼女は娘の手を引いていた。

「おじちゃんにご挨拶なさい」

「ヒナタおじちゃん、こんにちは。いつもテレビで見えています」

この時ほど、相棒に嫉妬を感じたことはない。

碧の娘、清香は“ひまわり”だった。愛くるしい笑顔を惜しげもなく披瀝し、玉の転がるような笑い声をあたりに響かせた。そんな清香をはさんで碧と影松が幸せそうにしている姿は、雛田にとってあまりにも眩し過ぎた。

彼は以前にも増して仕事に没頭した。あえて危険なレポートに挑戦することもあった。しかし彼の心の底には虚しさばかりが沈殿していった。こんなことを繰り返して何になる。誰が祝福してくれるというのだ。

そしてあの日。本番収録中に我を忘れて、会社の大先輩でもある有名司会者に悪態をつき、あまつさえネクタイをつかんで、床の上を引きずりまわしたのだ。

「熱湯に頭から飛び込むことにどんな意味があるんだよ。アンタがやってみろってんだ！」

今になって自らの大人げない行動に恥じ入るばかりだ。

仕事を干され、ひとり自宅に引き籠っていた雛田の許

に、ある日、一通の封書が届いた。清香からだった。

直筆の文面は、雛田の近況を小耳にはさみ、彼の身を案じる文章で埋められていた。

『これからもずっとおじちゃんファンです』

そう締めくくられた手紙を、あふれる涙をこらえながら雛田は何度も読み返した。

雛田は誓った。彼女に恥ずかしくない生き方をしている。そして、彼女が応援してくれる限り、せいっぱいががんばろうと。

気がつくと彼は元のオープンテラスに舞い戻っていた。紳士淑女たちは、流れる音色にうっとり聞き惚れている。しかし奏でられている楽器はピアノではない。

雛田はテラス中央の円形ステージに目をやる。

そこには、アルパを弾きながら雛田に笑顔を向ける清香がいた。

「おい、雛田！ 目を覚ませ！」

10

肩を揺すぶられて、雛田は正気を取り戻した。

「……夢を見てた」

「のんきな奴だなっ。怪我はないか？」影松が訊ねる。

「大丈夫……こぶを作ったぐらいだ」

雛田は額に手を当ててみる。血は出ていない。じんと鈍く痛むが、大したことはなさそうだ。

どれぐらい気を失ってたんだろう。雛田は周囲を見渡す。およそ十秒ぐらいか。

「ちと無謀だったな。車がはさまっちゃった」

相棒に言われて外を見た。なるほど四駆は通行レーンの両側に前後を食い込ませた形で停まっている。

背後で嬌声があがり、足音が近づいてきた。

「奴らが来る。どうにかして抜け出すんだ！」

「わ、判った」

雛田はギアをバックに入れると、エンジンを噴かした。しかし車体はほとんど動こうとしない。

「ダメだ」雛田は両手で万歳しながら叫んだ。「車を捨てて逃げよう」

「バカ、あきらめるな！ 少しずつでいい。車を前後に動かせ」

言われるままに雛田はハンドルを操作し、アクセルを踏み込んだ。バンパーがブースを押しやり、少しずつ空間ができていく。

「やるじゃないか。あと少しだ、慌てず急げ」

影松はそう言って、ドアを開いて降りようとした。

「おい、どこへ行く？」

「俺が時間を稼ぐ」

「やめろ！ 武器もないのに——」影松は雛田の制止も聞かず、車外に出るとドアを閉めた。

その時にはもうリーダーの男が目と鼻の先まで迫っていた。

「お前たちを通しはしない。他の連中みたいに車ごと丸焼きにして——」

「黙れ、クソガキ！」

影松の大音声があたりに轟いた。リーダーの男はわずかに怯んだ様子を見せた。後ろから駆けつけた子分たちも足を止める。

「俺とタイマンで勝負だ。言っとくが俺は空手五段だ。

お前のその生意気そうなアゴを、一撃で砕いてやるから覚悟しな！」

そう言うのと両手を前に構え、一歩前に踏み出した。

雛田は耳で相棒の台詞を聞きながら、こんなときに芸人根性丸出してハツタリをかますなんて自分にはとてもできない芸当だ、と舌を巻いた。

じりじりと影松は間合いを詰めようとする。

五人の男たちは完全に気を吞まれてしまったようだ。

互いに顔を見合わせると、後ろに下がり始めた。

その様子をバックミラーで見ながら、雛田は四駆を何

度も切り返す。

「なんとかしてくれよー」

幼さの残る子分のひとり、苛立ちの声を発した。それが引き金になったのか、リーダーはウオオオと雄叫びをあげると、両手で持ったボールで、影松を横ざまになりぎ払おうとした。

影松は慌てなかった。左腕と脇腹ではさむようにボールを受け止めると、同時に右の拳をリーダーの顔に叩き込んだ。

「ぐはっ」

噴き出した鼻血が弧を描いた。リーダーは道路に倒れ込み、両手で顔を覆いながらのたうち回る。

「済まねえな。アゴじゃなくて」

影松はボールを小脇に抱えたまま、他の四人に迫っていく。しかし相手はすでに戦意を喪失していた。

と、その時。

東京側の道路から数台の車が、サイレンを鳴らしつつ近づいて来た。メガホンを通した声があたりに響く。

《料金所を違法占拠している者たちに告ぐ。ただちに武器を捨てて投降しなさい》

続いて、いくつものサーチライトが光を投げかけてきた。

「チツ、公僕のすることあ、いつも遅いんだよ」

ガタンツと背中中で音がした。振り向くと四駆が今ようやくレーンの呪縛から解き放たれたらしい。

「坊主ども。あとは大人たちに慰めてもらえ。あばよ」
言い残すと影松は駆け出し、雛田が開いたドアに勢い良く飛び乗った。

「全速ダッシュだ。これ以上、足止めを食っちゃたまらんからな」

「オツケー。カゲヒナタ号の再スタートだ！」

四駆のエンジンはうなり声を上げ、アツという間に料金所を離れていった。

日の出が近いのだろう。周囲が明るさを増してきた。

「それにしても胸のすくタンカだったなあ。久しぶりに聞いたよ。カゲのハッター芸」

「なーに。ガキども相手じゃ、張り合いがなかったよ」

「言ってくれるねえ。僕は生きた心地がしなかったんだから」

雛田は笑いながら相棒に尊敬のまなざしを送った。相棒は眠そうな目をしながら、まだ小脇にボールを抱えたままだった。

「どうするんだい、それ。戦利品のつもりかい？」

「これか。……取れないんだ」

「？」

「だって、抜いたら最後、車の中が血の海になるぜ」

「な——！」

雛田は我が耳を疑った。

11

雛田は急ブレーキをかけ、百二十キロ近いスピードで疾駆していた車を道路の端に寄せた。

「この唐変木！　こんなところに停めやがって、景色でも眺めて休憩する腹か？」

影松は怒鳴るが、声にまったく力がこもっていない。

雛田は車を降りると、駆けるように反対側にまわり、助手席のドアを開けた。

「ウツ——ひどい」

相棒の左脇腹のYシャツが、にじみ出した血で真っ赤に染まっている。当人の言うとおり、食い込んだボールをはずせば、温泉のように血が噴き出すだろう。

「くそっ」

雛田は激しく舌打ちし、ドアを静かに閉めて、運転席に戻った。そして再びスタートするべく、サイドブレーキを握ったが、その手に影松の手がかぶさった。

「お前、何を考えてる？」

「決まってるだろう、病院に行くんだ」

影松は相棒から手を離すと、鼻先を掻きながら、
「そいつは勘弁してくれ。子供の頃から病院は嫌いだ」

「強がりには止めるよ。誰が見たって、その傷が重傷であることは明らかだ」

「だから言ってるんだよ、寄り道してる時間はない」

雛田はハツとした。相棒を見ると、彼の顔からはすっかり血の気が失せ、息づかいも荒くなっている。

「しかし――」

その時だった。言葉に詰まった雛田の視界の隅に、小さな明かりがぽつぽつと灯った。朝もやの中、明かりは進行方向から次々と現れる。

「雛田、エンジンを切れ！」

相棒の鋭い声に、雛田の指はキーをつかんでエンジンを切った。

明かりの大群は、あつという間に接近してくると、ふたりの乗る四駆の横を猛スピードで通過して行く。それは多種多様な車の集団だった。スポーツカーあり、業務用ワゴンあり、タクシーあり。どの車も満杯の人間を積んでおり、彼らはめいめいに何ごとか大声で叫んでいる。ある中型トラックの横には垂幕状のものがひっかけてあり、そこには『長野を守れ』『細菌テロを断固阻止せよ』などの文字が手書きの墨染めで書かれていた。

暴走集団は、料金所にいる仲間の危機に加勢するためか、四駆の存在など目にも留めずに駆け抜けていった。

大量の排気ガスを残して遠ざかる後ろ姿を、呆然と見送る雛田に、影松は苦しい息の下から、

「奴らのお祭り騒ぎが、人体砂状化現象に起因していることは、間違いなさそうだな」

「ということは、この長野で大掛かりなテロ攻撃がなされたっていうのか？」雛田は影松を振り返る。

「そうじゃないだろう。奴らは明らかに、外からの侵入を防ごうとしている。それも妙に暴徒化してな。ウツ」

影松は咳き込むと、口から血反吐を吐いた。

「バ、バカ、しゃべるんじゃないよ」

雛田はあわてて相棒の背中に手を伸ばすが、影松はそれをね飛ばして、

「いいか、聞け！ 俺はそう長くは保たない」

「情けないことを言うなよ」

「うるさい、黙って聞けつつってんだろーが！ これを見やがれ」

影松は右手をボールが刺さったままの脇腹に押し込むと、握りこぶしを作って、そのまま雛田の目の前に突き出した。

開かれた影松の手のひらから、朱に染まった砂がぽろぽろとこぼれ落ちた。

「――！」

「……俺も細菌とやらに、感染してたんだな」

「そ、そんな――やっぱり病院に行くべきだ。病院なら助かる手だてがあるはずだ。血清かワクチンか――」

「なあ、雛田よ」

影松は、それまでとは打って変わって、やわらかな視線を雛田に送った。

「お前は見たんだろ？ 人間が砂になって崩れていくところを」

雛田は言葉に詰まって、視線をそらした。

「残された時間が、あとどのくらいなのか……。この相棒サマの最期の頼みを聞いてくれよ」

雛田はぎこちなく頷いた。

「ありがとう。さあ、先を急ごうぜ」

前を向いた雛田は、無言でエンジンを始動させた。クラッチをゆつくりと上げ、四駆のスピードを徐々に上げていく。車の振動が、影松の身体に障るのを恐れたためだ。

高速道路の上は、相変わらず他に一台の車も見えない。四駆は夜明けの冷たい空気の中をひた走りに走った。

「俺、思うんだが……ひよつとすると清香が困ってることって、奴らの騒ぎに関係あるんじゃないかな？」

「――僕には判らない。判らないけど、清香ちゃんだっ

たら、きつと、県内に不穏な動きがあることぐらい、警告してくれるんじゃないかな？」

「おお、さすが雛田。俺より清香に対する理解度が高いじゃないか。さすがだね」

「変な喜びかたをするなよ。気持ち悪いじゃないか」

雛田は泣き笑いの表情を浮かべながら、四駆をさらに加速させる。

「いや、さすがと言ったのはお世辞でもなんでもない」

「……」

「この際だ、ハッキリ言っておこう。——清香はな、俺の本当の娘じゃないんだ」

「——はあ？」

「お前だよ、雛田。お前が清香の、実の父親だ」

12

四駆がスルスルとスピードを落としていく。相棒に、足、足と指摘されて、雛田はようやくアクセルから足を浮かせていたことに気づいた。

「カゲ！　こんなときに、冗談が過ぎるぞ」

「駆け出しの三流放送作家でも書かん、ありふれたツツコミを入れるな。瀕死の人間が、いまわの際にこんな冗談を口にすると思うか？」

ピンクのカバ——影松のPAI——が、《次のインターチェンジで降りて》と指示を与える。物悲しげな声のご主人様の運命を哀れんでいるようだ。

軽井沢方面への出口を示す標識を頭上に見上げながら、雛田は相棒の言葉を否定する。

「ありえないぞ。そんな話、信じられない」

「事実だ。同じことを二度も言わせるな」

「あ、判った。自ら父親失格の烙印を押して、僕に父親業をなすりつけようという魂胆だろう」

「むりやりの発想だな。まあ失格であることは認めるが、それとこれとは別だ」

四駆はインターチェンジに入った。アールに沿って道なりに走る。遠望されるのは浅間山か妙義山か。

幸いにも、料金所に暴徒の姿はなかった。道路公団の係員すら見えず、四駆はスピードを上げてレーンをすり抜けた。

影松はまた咳き込んだ。膝の上が真っ赤になり、ザラリとした砂粒が足許にまでこぼれ落ちた。

雛田は泣きたくなる気持ちを精一杯抑えつつ、ひたすら目的地へと急ぐ。もはや制限速度も気にしていない。

「うー」雛田は頭を振った。「どう考えても不可能だ。

だいいち計算が合わないじゃないか。碧が——碧さんが僕と別れてカゲと結婚するまで約二年。清香ちゃんは結

婚式の時、確かに碧さんの大きなお腹の中にいたんだ」

「……謝るよ。すまなかった」

「？」

「碧の臨月の腹は、作り物のハリボテだったんだ」

「——どうということだ？」

「聞いてくれ。当時売れっ子になりつつあった俺たちカゲヒナタのひとりと、かたや若手注目株の美人ピアニストの結婚に、マスコミの耳目が集まっていた。そんな状況で、彼女の娘の父親が、結婚相手の男性ではなく、その相方であるとなれば、好奇の目から逃れられまい。少なくとも碧はそう考え、娘の将来をおもんばかって悩み、決断したんだ。お前を含めて世間の目を欺くためにな」

雛田は眉間のあたりが痛くなった。運転しながらでは考えがまとまらない。思いついたままの質問をぶつける。

「清香ちゃんは、いつ生まれた？」

「お前と碧が別れた九ヶ月後だよ。大きくて元気な赤ん坊だった。母親も身長があったからこの子も大きくなるだろうって言われたな。……そんなわけでお前には悪かったが、一年間彼女の存在を隠していた。並大抵の苦労ではなかったが、碧も苦渋の決断だったんだよ」

そういえば、清香のCDをかけた時、影松は彼女の年齢を『二十三だ。いや違う、二十二か』とあわてて訂正した。彼の中では清香の実年齢と公称年齢が常にぶつ

かっていたのだろう。

だからといって納得できる話ではない。

影松は続ける。

「碧は結婚式を終えると、すぐにパリへと旅立った。そのまま向こうで過ごし、出産したことになっているが、そのじつ一年前に生まれていた清香との生活を始めたんだ」

「僕はずっとだまされていたのか……。滑稽だな」

「お前だけじゃ……ないさ」影松の声はますますか細くなる。「清香も知らないことだ」

「なんだって？」

危うく四駆をガードレールに接触させそうになる。

「そうなんだ。俺は何度も碧に言ったんだがな。せめて清香には打ち明けてやれって。碧は頑として受け入れなかった。清香は繊細だし、今さら真実を話してもショックを受けるだけだ。それならこのままで十分だとな」

雛田は理解できなかった。碧はなぜ娘の出生を偽ったのか。やはり自分との別れが尾を引いていたのか。

「……そもそもカゲは、相方の子を身ごもる彼女と、納得ずくで結婚したのか？」

「今度は俺が矛先か。……答えは《もちろん》だ。碧から相談を受けてるうちにな。……知つてのとおり、ここ長野の穂高町の旧家で生まれた彼女は、古風な考えの

持ち主だったから、娘に父親がいないことに悩んでいた。俺はお前とやりなおすことを何度も勧めたが、彼女は修復は不可能だと首を横に振り続けた」

雛田の心は激しくかき乱された。若き日の姿を思い出す。喧嘩の原因は、本当にささいなこと。取るに足りないことだったのだ。なのに自分は口汚く彼女を罵ってしまった。若気の至りというにはあまりに恥ずかしい過去だ。

「……でもな、碧はお前に未練があつたんだぞ」

「いいよ、そんな話は」

「いや、いま伝えておかないと次の機会はない」

雛田は無言で前を見つめる。四駆はカバのナビに合わせて軽井沢バイパスへと入った。

「もうすぐ到着だ。清香ちゃんには自分の口から本当のことを告げるんだな」

「無理……だ」

その声は、もはや人間ものではなかった。

「弱音を吐くな！ おいカバ、到着までの所要時間を教えてくれ」

しかしカバは応えない。そう、P A Iは持ち主つまり飼い主以外には反応しないのだ。

「……とめて……くれ」

「どうして!？」

「……いいから」

雛田は、チクショーと怒鳴るとブレーキを踏み、道路脇に車を停めた。

長年連れ添った相方が——幾多の苦難を共に乗り切り、困った時には手を差し伸べてくれた相棒が、いまその生涯を終えようとしている。

「僕にできることは、何もないのか！」
激しい絶望感が彼を襲う。

「ヒナ……」

頬を濡らしながら、声の方に顔を向ける雛田。彼の目に、影松の顔が突然、神々しいばかりに光り輝いて見えた。

13

それは何とも形容しようのない光景だった。

影松の身体は、元の姿より二割ほど縮んだように見えた。露出している肌は、首から上とYシャツの手首から先だけだが、どちらもほぼ土気色に変色していた。もしこれが自分の相棒ではなく赤の他人だったなら、ホラー映画でモンスターに遭遇した不幸な人間のように、わめき声をあげながら四つん這いで逃げていたかもしれない。それほど影松は、世にも奇怪な姿に変貌していたのだ。

しかし彼はまだ《人間》だった。彼の上半身は輝きに満ち、包み込むような優しい光が彼の人間としての尊厳をつなぎ止めているように見えた。

「……朝陽とは、これほど美しいものだったのか」

彼は呟いた。雛田はフロントウインドウから外に目をやった。

影松に降り注ぐ光の正体は、たったいま山裾から顔を出したばかりの太陽光だったのだ。遮るものない青空、生まれたばかりの曙光は、冷えた空気を貫いてまっすぐ影松の胸や顔を照らしていた。

「……空を見上げる余裕すら……なかった俺の人生だったが……最期の最期に……祝福してくれてるようじゃないか……なあ、雛田」

雛田は流れる涙を拭おうともせず、ただウンウンと頷くばかりだった。

言葉を発するたび、影松の唇や頬からぼろぼろと砂粒が落ちていく。服の上からではよく判らないが、彼の左手はすでに付け根から離れ落ちているようだった。

「……俺を看取ってくれるのが……お前で良かったよ」

「ハ——ハハ、綺麗どころを数人、帯同するべきだったかな」

「……そういうのは……もう飽きたよ……お前に譲る」

影松は微笑んだようだったが、よく判らなかった。

「雛田……俺の遺言だ……よく聞いてくれ」

雛田は深く頷いて、相棒の土人形のような顔に自分の顔を近づいた。

「……清香を助けてやってくれ」

「判ってる」

「……彼女を連れて、一刻も早く長野を脱出するんだ」

「お、おう」

「……今日から……お前が父親だ。いいな？」

「ああ」

「……俺の預金口座の情報や暗証番号などは……うう、そのカバに教えてある……遠慮なく使ってくれ」

影松はP A Iに視線を送ると「カバ公、今後は雛田に……お前へのアクセス権限を委ねる……いいな？」

カバはフウーンと蚊の鳴くような返事をした。影松は視線をゆつくりと雛田に戻す。

「このカバ公には……清香がお前と……碧の子である証明書類も……うう、全部記録してある」

雛田は相棒の最期の姿に胸を打たれた。もはやいつ碎け散ってもおかしくないはずだ。こうして話している間にも、耳たぶがこそげ落ち、右手首が床に落ちた。彼の精神力か、持って生まれた《生》への執着心のなせる技か、そんな強い力が今の彼を支えているのだ。

雛田は笑顔を作りながら、相棒の濁り始めた目をのぞ

きこんだ。

「よく判った。あとはちゃんとやるから安心してくれ」
しかし影松にはもう聴き取る力がないようだった。

「……そうだな。よくやったよなあ……俺たち……思い
残すことはない……」

影松の目から光が失せ、上体が斜めに傾いた。雛田は
あわてて抱きとめようとしたが、影松は驚くべき気力で
姿勢を支えた。

そして突如、目に光がよみがえると、次の言葉が最期
の台詞になった。

「いいか、雛田。怪我だけはするなよ！」

次の瞬間、眼球は完全に土と化し、影松の頭部は首の
付け根から横滑りすると、前のめりに落下した。

雛田はそれを両手で受け止めた。

首から下の部分は、細かい砂粒となって床の上に散乱
した。

雛田の手の中に残った無二の相棒、影松豊の頭は、わ
ずかに笑みを浮かべた表情をとどめていた。

少し車を進めたところで雛田は二十四時間営業のコン
ビニを見つけ、食品包装用のラップフィルムやドライア
イス、大きめのクーラーボックスを購入した。

車に戻った雛田は、上着に包んでいた相棒の頭部を、

崩れないようラップで包むと、ドライアイスを仕込んだクーラーボックスの中に、ていねいに安置した。

どうしようという考えがあつたわけではない。ただ、できるならどこかちゃんとした場所に埋葬してやろうと思っただけだった。

ふと、影松がなぜ車を止めさせたのか、雛田はその理由に思い至った。

相棒は、自分の惨めな姿を清香に見せなくなかったのだ。急げばあるいは彼女の顔を一目見ることができたかもしれないのに。

それはきつと、影松なりの愛情だったに違いない。清香が実の娘ではなかったとしても。

カバのナビに案内されて、四駆は国道をそれ、細い道に分け入った。しばらく砂利道が続き、それを抜けると、雛田はとうとう目的地である音楽スタジオにたどり着いた。

車の液晶時計は、六時十分を指していた。

14

四駆のドアを開けたとたん、雛田は大きくしゃみをした。鼻腔が妙にもぞもぞする。花粉症の季節でもない

のにと、車の屋根に手を置いて周囲を眺める。

彼が車を止めたスタジオ専用の駐車場には、十六台ほどの駐車スペースがある。周囲は背の高い木々に囲まれ、早起きの小鳥たちが枝の上で楽しげにさえずっている。

スタジオの敷地は、林の中にぽつかりと空いた広場のようなどころにあつた。車道や搬入口など舗装は最低限に抑えられ、大部分は短く刈り込んだ芝生が綺麗に生え揃えられている。

「はーつくしよい！」

雛田はふたつめのくしゃみをした。どうやら空気のせいらしい。特有のにおいというか湿り気というか、およそ感じたことのない物質が含まれている——彼にはそう思えた。悪いにおいではない。それどころか吸えば吸うほど身体の中にすがすがしさが広がっていく。相棒の結婚式で訪れて以来の軽井沢だが、こんなはずれまで来たことはなく、彼の嗅覚にとつては初めての経験であつた。

グラストンベリー・スタジオは、そんな敷地の北寄りにあつた。彼は車のドアを閉めると、ゆるめていたネクタイを締め直し、玄関に向かって歩き出した。

スタジオは三棟の建物で構成されていた。正確にはそのひとつ、ノコギリ刃のような大胆なデザインの屋根を持った左端の建物がレコーディングスタジオなのだろう。手前、南側に壁はなく、数本の太い柱に支えられた分厚

いガラスが全面に張られてあり、開放感を大いに演出している。

他の二棟は住居らしい。平屋のスタジオに対して、どちらも二階建てだ。片方が職員用、片方が宿泊者用か。

雛田はガラス越しにスタジオの中をのぞき込んだ。受付カウンターや、ゆったりとしたミーティングルームのような部屋が見える。人の姿はどこにもなかった。

まだ朝の六時半。誰も皆、まどろみの中なのだろう。

雛田はガラスを背に、芝生の上に腰をおろした。

静かだった。喧噪の東京とは別世界だった。

高い空。心地よい風。空気のおいも今はうまいと感じられる。

彼の乗って来た四駆、ハイラックスサーフの向こう側に、大小三台の車が止まっている。一台は清香の車だろうか。彼は記憶をまさぐる。もらった手紙のどこかに愛車について触れられていなかったか。確かあったはずだ。車種は……レガシィツーリングワゴンの昨年のニューモデル！

立ち上がって目を^{すが}眺める。奥行き^{すが}の長い一台、ガーネットレッドの車体が見える。たぶんあれだろう。

——清香は、この敷地の中にいる。

雛田の心臓は早鐘のように脈打った。

（彼女は、僕の娘……）

昨日までの彼には思いもよらないことだった。

いや、彼女からの手紙を読むたびに、こんな娘が我が子であつたらと考えるではなかった。しかし夢想するのと、実際にそうなるのでは天と地の差がある。

（何とも言えない気分だ）

雛田は両手で髪を梳くと、背中をガラス戸にもたせかけた。その時――。

どこからか弦楽器の奏でる音楽が聞こえてきた。

彼は後ろを振り向いた。

この中だ、中から聞こえてくる。

雛田は玄関へと走った。

エントランスは幸い施錠されていなかった。彼はためらうことなく、屋内に足を踏み入れた。

弦の音は聞こえなくなった。しかし彼は確信を持って断言できた。あれはアルパの音だ。清香の弾く音だ。彼女は今このスタジオにいる！

一度は落ち着いた心臓が、また激しく鼓動し始める。

彼は次々と扉を開いては前に進んだ。

そして半開きの扉のひとつから漏れる音を彼の耳はとらえた。彼は中に飛び込んだ。

「清香ちゃん！」

彼の目と耳に飛び込んできたのは、部屋の暗さと、耳を覆わんばかりのアルパの音だった。

そこはコントロールルームだった。幅の広いミキシングコンソールが右手中央に設置されており、暗い中で赤や緑のランプが規則的に並んでいる。

彼は右に首をめぐらせた。大きな窓ガラスが嵌め込まれた向こうは録音スペースになっている。そちらが比較的明るいのは、間接照明によるものだろう。

（こういうことだ？ 誰もいないなんて）

雛田は二、三步、部屋に足を踏み入れた。アルパの演奏は依然続いている。彼は狐につままれたような顔であったりを見回す。

コンソールの上では、緑のインジケータがせわしなく上下動を繰り返していた。どうやらこの演奏は録音したものを再生しているだけらしい。彼は手を伸ばしてメインフェーダーを探り当て、音量を小さくした。

コンソールに両手を付きながら、ふーっと息をつく。

「おじさま？」

背後で女性の声がした。雛田は反射的に振り向いた。

暗がりの向こう、部屋の片隅で、黒い影がむくむくと立ち上がった。

「清香——ちゃん？」

黒い影は人の形になり、ゆっくりと近づいてくる。

雛田は、コンソールの放つ光に照らされ浮かび上がった顔を見た。

まぎれもなくそれは、影松清香だった。

幽霊のように現れた彼女の顔には、くつきりと涙の跡が刻まれていた。

15

「おじさま！」

清香は雛田に駆け寄り、飛びつくように抱きついた。

雛田は尻をコンソールにぶつけながら、彼女の突進をどうにか受け止めた。

雛田はひどく動揺していた。

コンサート会場を除けば、彼女と直に会うのは数年ぶりである。しかも彼女に触れたのは、彼女が幼少の頃以来ではないだろうか。

そばで見る清香は大人の女性に成長していた。身長が百六十六センチの自分とほぼ同じ背丈ではないだろうか。「おじさまも来てくれたのね。うれしい」

清香は、ひたいを雛田の肩に押しつけながら、涙声で呟いた。

雛田はさらに動揺した。

（この子は、僕が影松といっしょに来たと思っている。彼が亡くなったことをどう伝えればいいのだろう。そのうえ、僕がこの子の本当の父親であることも告げなければ

ばならないなんて……)

雛田は、課せられた使命の重圧を振り払うように頭を左右に振ると、

「さあ、泣いてないで。何があつたのか話してごらん」
いたわるように声をかけ、清香の両肩を抱きながら、そばの椅子に座らせる。自分も別の椅子を引き寄せると、彼女の斜め横に腰掛けた。

清香は指先でしきりに涙を拭う。雛田の顔を見て安心したのか、まるで決壊した堤防のように、後から後から涙がこみ上げてくるらしい。

(泣き顔を見るのは初めてだ。いつもは笑顔を絶やさない子が……)

雛田は混迷を深める。ひとまず間を取ろうと、上着の内ポケットからハンカチを取り出すと、清香の手に持たせた。彼女はわずかに頭を下げると、ハンカチを両目に押し当てた。

「二日前の朝だったの」清香はぼつぼつと話し始めた。

「変な胸騒ぎがして早起きしたのね。まだ日の出前で暗かった。二度目は無理そうだったので、散歩に出かけたの。ところが、林の中の小道を真ん中まで来た時、ぐるぐると景色が回転しだして、気づいたら……」

言葉が途切れた。

「気づいたら？」

雛田がさりげなく先を促す。

「……おじさまでも信じてくれないと思う。そんなバカな話はないって」

「でも、話してくれなくちゃ判らないよ」

「……おじさま、『鏡の国のアリス』って知ってる？」

唐突に、意表を突いた質問を浴びせられ、雛田は金魚のように口をぱくぱくさせた。

「アリスはね」清香は続ける。「物語の冒頭で、鏡の中に吸い込まれるの。そしたら自分はそのままなのに、慣れた寝室が反対になってるの」

「鏡に映ったままの世界？」

雛田は清香の意図がつかめないまま、話を合わせる。

「そうなの。右にあったものが左にある——。それだけじゃないの。本に書かれた文字は裏返しになってるし、時計の針は逆回りに動いてるし……ありえないでしょ？ そんなこと」

「……………」

「林の中では、すぐには判らなかった。でも遊歩道の道筋がおかしかったの。見たこともない曲がりかたをしていて。しかたなくそのまま歩いたの。そしたらこのスタジオが見えてきて……わたし、ものすごく大きな悲鳴をあげてしまったの」

「まさか——」

こくりと頷く清香。

「そう。建物は、鏡に映したみたいに正反対になった。わたしは林の出口に膝をついたまま、長いこと悲鳴をあげ続けていて。聞きつけて何人かの人たちが、パジャマ姿のまま出てきてくれたんだけど、おかしいの。みんなの顔が」

「顔も左右反対？」

ふいに清香は顔を上げると、まじまじと雛田の顔や身体を凝視した。

「おじさまもだ。ワイシャツのボタンが――」

雛田は自分の腹のあたりを見おろした。くたびれたネクタイの下ボタンは、ワイシャツの生地を左上にして留まっている。

「ハハハ。でも中身はまちががなく君の知ってる人間だよ」雛田は清香の不安を取り除こうと、おどけたように両手を広げた。そしてすぐ真顔に戻ると、清香の手の甲を優しく叩いてやった。

清香は気分が落ち着いたのか、話を続ける。

「それからずっと宿泊棟の部屋にいたの。みんな心配してくれたけど、一步も外に出なかった。だから食事もほとんどとらなかった。そのうち誰も声をかけなくなつて、わたしはベッドの上で布団にくるまったまま、じっとしてた。電話のコールにも出なかったし。なんだか怖くて。

一日過ぎて、昨日の朝になっても状況は変わらなかった。どうしようどうしようって焦り出した。とりあえず携帯メールのチェックをしてみたの。ボタンも反対に付いてるし、操作に苦労したけど、メールの文章は鏡に映して読んだの。メル友の何人かが定例メールのお返事がないねってメールくれてた。松ちゃん、どうかした？って。あ、松ちゃんってわたしのことね」

清香は軽く舌を出した。元気が戻ってきたようだ

「でも」再び清香の視線が床に落ちた。「変な迷惑メールがたくさん届いてて、また怖くなって」

「迷惑メール？　どんなのが？」

「差出人は『長野防衛隊』になってた。内容はだいたいどれも同じなの。『我が長野県が恐るべき細菌テロの標的になっている。県民は一丸となって、テロリストの侵入を阻止しよう』って」

16

雛田は、高速道路の料金所を不法に占拠していた若者たちを思い出した。彼らが長野防衛隊？　名称のわりには組織立った様子も、統制のとれた気配もなかった。せいぜい暴走族同士の抗争に毛が生えたようなものだ。どこが「県民は一丸」なんだ？

「おじさま」

清香の呼びかけに、雛田は思考を中断させる。

「ん？」

「お父さんは？」

ついにきた。雛田は、自分を見つめる清香の視線を逃れ、間接照明にぼんやり浮かび上がる録音スタジオを見やった。隅には彼女のものだろう、アルパが二台、立て掛けられていた。

「やっぱり」清香のため息が聞こえた。「お父さん、来てくれなかったのね。お仕事が忙しいとか言い訳して」「違う」雛田はあわてて顔を戻した。「そうじゃないんだよ。これにはその、理由があつて——」

「いいの。……お父さん、何かあつたらいつでも連絡して来いって言つてたのに。」

お母さんは日本にいないし、おじさまとは緊急連絡がとれないし、妙な防衛隊メールはどんどん届くし。悩みに悩み抜いて送ったメールなのに、おじさまに代役を押しつけて自分は来ないなんて……ヒドい」

「違うんだ！」

雛田は自分の膝を両手で叩いた。

「……違うって？」

「お父さんは——影松は来たんだ。昨夜車に乗っていっしょに東京を出発したんだよ」

「じゃあ、いま外にいるの？」

「清香ちゃん。僕の話をしつかり聞いてほしい。影松は亡くなったんだよ」

「……………」

「今朝まだ暗いうちに高速道路を走って、長野に入ったんだ。ところが料金所が不逞な輩やからに襲われて、バリケードが作られていた。僕たちは車ごと強行突破しようとしたんだ。でも失敗した。僕がはさまった車を動かしている間、彼は身体を張って、連中の攻撃をくい止めてくれた。おかげで車はバリケードを突破することができたんだけど、彼は怪我を負った。そして、ここに来る途中に、命を落とした」

「そんな——」

「僕だって、嘘だったらと思うよ。でも本当なんだ」

清香は大きく目を見開き、雛田の顔をじっと見つめた。そして嘘ではないと知ると、雛田の膝に取りすがり、激しく嗚咽の声をあげた。

雛田も相棒の死にあらためて涙を流した。そして彼は思った。今は本当の父親が誰であるか、彼女に話す時期ではないと。

「お父さんは、本当に来ようとしてくれたのね。わたしのメールに応えて」

清香は涙を出し尽くすと、消え入りそうな声で雛田に尋ねた。

「うん。たまには父親らしいことをしてやりたいとね」

「フフフ、らしくないと言っちゃって」

清香は無理に微笑んでみせた。

「でもどうしてこんな早朝から、ひとりでここにいたんだい？」雛田は先から不審に思っていたことを尋ねた。

「しかも大音量で音を鳴らしたりして。宿泊棟の部屋にいたんじゃないの？」

「そうだったんだけど……お父さんにメールを送った後、いつこちらへ到着するか判らないと思って、起きてたの。でもただ起きてるのはつらかったから、真夜中にこっちへ来たの」

「お父さんは何度か電話をかけたらしいよ。つながらないとぼやいてたけど」

「それはこちらからも同じだった。昨日の夜あたりから受信状態がひどく悪いの」

それも例の長野防衛隊のせいかもしれない。雛田はそうにらんだが、これ以上怖がらせたくないと思って口にしなかった。

「聴いていたのは新曲かい？」

さつきまでスピーカーから小さく流れていたが、最後まで再生し終えたのか、今は静かだ。

「うん、三日前に録音したばかりの曲」そう言うと、清香は座ったまま、意味ありげに膝を進めた。

「おじさま」

「うん？」

「お父さんの……亡骸なきがらは？」

雛田は目を閉じた。やはり話さないわけにいかないのか。

「——君の携帯に、細菌テロ云々っていうメールが届いたと言ったね？」

「うん」

「お父さんは、細菌兵器にやられたんだ。だから亡くなると同時に、遺体は砂になってしまった」

「……見せて」

雛田は彼女の要望を退けることができなかった。

太陽はぐんぐんと上昇を始めている。徹夜明けの雛田には厳しい陽光だ。しかし、遠くの空に怪しい雲が少しばかり浮いている。午後には天気が崩れるかもしれない。雛田は清香を連れて駐車場に出た。彼をここまで運んだ四駆は、ボンネットが大きくへこみ、車体は痛々しい擦り傷だらけだ。

彼は助手席を開けてみせた。そこにはていねいにたたまれた影松豊の着衣と、ひとかかえもあるビニール袋に

詰まった砂が置かれていた。ここに到着する前に、雛田が備え付けの携帯用掃除機を使つて必死にかき集めた相棒の残骸である。

清香は袋越しに中の砂を撫でた後、しばらく両手を合わせて拝んでいた。その時、後部座席の足許あしもとに置かれたクーラーボックスに気づいて、あれは何と尋ねた。

「お父さんの頭が入ってる」

「……見たい」

雛田は今さらながら自分の処置を後悔したが、観念してクーラーボックスを車外に取り出し、中を開いた。

四駆の揺れは予想以上だった。新聞紙を丸めて緩衝剤にしていたものの、影松の頭部は半分がた崩れていた。それでも、土人形のようなその塊は、影松豊の面影をじゅうぶん残していた。

「お父さん……誰がこんなひどいことを」

清香は、泣き顔に続いて、かつて雛田に見せたことのない表情を浮かべた。

怒り、だった。

あふれ出る涙を拳で乱暴に拭うと、清香は紅潮した顔を空に向けた。雛田は胸中に渦巻く思いを抱いたまま、

彼女の横顔をただ眺めるばかりだった。

雛田の目に映る清香は、何度も両手で抱き上げた少女ではなく、強固な意志を感じさせる、ひとりの女性だった。すらりとした肢体を派手な色合いのタンクトップとブルージーンズに包み、セミロングの髪を朝の風にそよがせながら物思いにふけるさまは、十代の娘にはないリアリティを感じさせた。

（もう二十二、いや二十三歳なのだから、当たり前といえは当たり前か）

清香は影松豊の変わり果てた姿を前にして、視線を逸らすことなく見つめ続けている。まるで肉親の無念を受け継ごうとするかのように。見たままを脳裏に刻み込もうとするかのように。

今まであえて避けていた疑惑が、むくむくと頭をもたげるのを雛田はどうしようもなかった。この子は正真正銘、自分の娘なのか？ 間違いはないのだろうか？ こまで相棒の残した言葉を鵜呑みにしてきたが、確証も実感も得られないまま、清香のあらわな感情にこうして接すると、どうしても確信が揺らいでしまう。

——俺の携帯の中に証拠がある。

相棒はそう言い残した。あのため息ばかりつくカバが証言してくれるというのか？

いや今はそんなことはいい。問題はこれからどうする

かだ。

雛田は急に疲れを感じた。昨夜からさまざまな事態に遭遇し、一睡もしないまま傷だらけの四駆を走らせ、ようやく軽井沢にたどり着いた。その疲れがいちどきに押し寄せ、彼の思考は泥のように鈍くなった。

清香の動く気配にそれでも彼は顔をあげた。彼女は駐車場のアスファルトの上に膝をつくと、両手を合わせて拝む姿勢をとった。彼もつられて頭を垂れる。

朝陽は人間どもの苦悩も知らぬげに、暖かな日差しで駐車場を満たした。

「……ありがとう。お電話もらえてうれしかった」

清香の話し声に、雛田は目を覚ました。

疲れに負けて眠ってしまったようだ。あたりを見回す。依然、自分と彼女以外の人影は見あたらず、にぎやかな小鳥のさえずりが聞こえるだけだ。

「おじさまが来てくれたので、もう大丈夫。……うん、わたしね、鏡の国に迷い込んだみたい。この世界がみんな裏返ってしまったの。信じられないでしょう?」

清香は少し離れた場所で携帯に話しかけている。友人からかかってきたのだろう。

雛田はズボンのポケットをまさぐると自分の携帯を取り出し、液晶時計を見た。午前八時を少しまわったところ

ろ。一時間ばかり眠ってしまったらしい。

彼は一応、標準的な携帯を持っている。通話やメール機能は頻繁に使うが、写メールも写ムービーも使わない。テレビやビデオ機能にも恩恵にあずかったことはほとんどないし、ましてやP A Iは起動すらしたことがない。初対面の挨拶代わりに互いのP A Iを見せ合うことも珍しくない昨今、彼のように「飼ってませんので」と応える人間は偏屈以外の何者でもない。

「もしもし？ いいのよ、信じられなくても。わたしもまだ夢の中にいるみたいだし……。それじゃまた電話するね。シマさんもお元気で」

清香は電話を切ると、こちらに戻ってきた。

「起こしてしまつてごめんなさい。お友達からコールがあつたの」

「シマさんとか言つてたね。もしや？」

「うん、ダ・ヴィンチの揣摩太郎さん。去年のコンサートに来てくださつてから、ときどき電話で話すの」

「へえー。すごい大物が彼氏なんだね」

「違う違う。デートもしたことないのに」清香は否定したが、まんざらでもないようだ。「揣摩さん、ときどき相談に乗つてくださるの。昨夜メールを出したんだけど、さつき着信したつてお電話くださつたのよ」

雛田は思う。もし自分が本当の父親だとしたら、彼女

はこれほどフランクに男友達の話をするだろうか？

「でも彼は関西に引越したんじゃないかなかったつけ？」

「スゴい」清香は感嘆の声をあげた。「さすがおじさま。まだ誰も知らないはずなのに。そうなの、突然、大阪の大学に通うんだって——」

清香の言葉が消え入るように途切れた。視線の先には四駆があり、影松の遺体というべき砂が置かれていた。

清香は雛田のそばにしゃがみ込んだ。

「……わたし、きつと鏡を通り抜けたの。あの朝、次のアルバムの曲作りのことであんまり悩んでいたから、林の中の遊歩道に鏡があつたことに気づかなかつたのね」

どうやら清香は『鏡の国のアリス』に自らの境遇をなぞらえているらしい。

「魔法にかけられて困ってるわたしを、白の騎士^{ナイト}のお父さんと赤の騎士のおじさまが馬に乗って助けに駆けつけてくれたの。でも白の騎士は馬から転げ落ちて——砂にされてしまったの」

「うん」

雛田は大きく頷いた。彼女の言うとおり、これは夢なんだ。だいいち人間が砂になるなんて魔法以外の何ものでもないじゃないか。細菌テロ？ そんなアニメみたいな兵器が現実にあるわけない！

雛田は右の手のひらを清香の肩にそつと置いた。

「赤の騎士は白の騎士から重大な遺志を託されたんだ」

「……どんな？」

清香はさすがのような目で雛田を見た。

「命に代えてもアリスを守ってやってくれ、と」

18

柄にもない台詞を口にしてしまったことで、元芸人の悲しい性、雛田は思わず冗談で自己フォローしそうになったが、すんでのところで我慢した。そんなことをしたら清香の“夢”を壊しかねない。

清香は前髪で目の表情を隠したまま、二度ほどぎこちなく頷いた。そして長い足を伸ばしながら、ゆっくりと立ち上がり、

「わたし、許さない」

まるで目の前にいる誰かに宣戦布告するような口調で続けた。

「お父さんとおじさまを苦しめた魔法使い、を許さない」

——!?

「おじさま、わたし判ったの。魔法使いを退治すれば、かかってる魔法が解ける。そしたらお父さんはきっと元の姿に戻るはずだし、わたしは再び鏡を通り抜けて元の世界に帰れるはずだって」

雛田は返す言葉がなかった。彼女は、魔法やら鏡の国やら、本気で言っているらしい。父親（と信じている男）の非業な死に直面し、少しでもショックを和らげようと話を合わせた手前、今さら「待ってくれ」とも言えない。いくら人並みはずれた想像力——かつてマスコミが「暴想力」ともてはやした——の持ち主とはいえ、ゴシックホラーのような少女趣味の世界（違うか？）にはさすがに付いていけない。

「それとも、元の世界のお父さんは無事なのかなあ？」
さらに夢見るように呟く。

雛田は強引に独り合点した。現実からの逃避、いや彼女なりの現実への対処なのかもしれないと。だとしたら否定するような言動は慎むべきだ。プレッシャーに苛ま^{さいな}れ、潰れていったアイドルを何人も見てきた自分だ。空想が傷を癒してくれるならそれもいいじゃないか。今しばらくは——。

音がしたので、ふたりは首を巡らせた。

スタジオに隣接する建物の入口から、禿頭にひげ面、しかもエプロン掛けという、ペンションのオーナーを絵に描いたような人物が箒^{ほうき}を片手に現れた。雛田とたいして年齢は違わないだろう。こちらに向かってぺコリと頭を下げる。清香もおじぎを返し、雛田も合わせて返礼する。とりあえず彼女の保護者然としていたほうがいいだ

ろう。

「スタジオ住み込みの賄い^{まかな}さんよ。結城^{ゆうき}さん。——そう
だ、おじさまも朝食はまだでしょう？」

「ああ、ぺこぺこだ」

「それじゃ頼んでくるね。昨日スタジオからごつそり人
がいなくなったので、少ないときの増減は誤差に入れて
もらえないから」

清香は建物に向かって駆けていく。

ちようどいい。今のうちにカゲの携帯、主人をなくし
たピンクのカバに、訊きたいことをぶつけてやろう。

雛田は四駆の軋むドアを開けると、ハンドル脇のコネ
クタに差し込まれたままの携帯に手を伸ばした。

軽くトンと叩く。ピンクのカバが起動音とも鳴き声と
もつかない奇妙な声をあげながら姿を現した。

「さて、何から質問すればいいのやら」

とにかく清香だ。彼女は、絶対に、間違いなく、確実
に、自分の娘か？

このカバが証拠を持っているというが、デジタルデー
タによる証明に信頼性はあるのか？

母親の碧は、なぜ彼女の出生に関わる事実を秘匿した
のか？

整理できないまま、次から次へと疑問が浮かび上がり、
頭が混乱し始める。加えて日頃からP A I 否定派の看板

を掲げている身としては、作りものの動物相手に深刻な質疑応答をおこなうというのは、いささか、かなり、抵抗がある。

（急がないと、あの子が戻ってくるぞ）

気ばかり焦って、一向に埒が明かない。清香はまだ結城氏と話し込んでいる。距離があるので声までは聞こえない。

クソツと自らの膝を拳で叩く。

判っている。事実がはつきりするるのが怖いのだ。いきなり二十三歳の娘を持つ父親になるのが怖いのだ。彼女に対してどう振る舞えばいいのか、どう責任を取ればいいのか、すべてに心の準備ができていないのだ。逆に、聞かされる側の彼女も同じ立場に立たされることだろう。彼女自身はどう反応するだろうか。

そうだ、一番怖いのはそれかもしれない。

（ああ、煮え切らない奴だな、僕は……）

「この、優柔不断ヤロー」

——!?

思考が凍りつき、全身の血流が止まった。

「だ、誰だ!？」

裏返った声で叫ぶと、周囲を見渡した。車内には誰も

いない。しかし耳に届いたのは、まぎれもなく自分に向けた言葉だった。しかも声の主は——カゲ？。

《キヨロキヨロしてるんじゃない。俺はここだ》

ようやく捉えたの声の源は、ピンクのカバだった。な
んでコイツが——。

《ありきたりな反応で時間を無駄にするな。俺だ。影松
豊だ。こんなナリだが気にするなよ、相棒》

ピンクのカバは、カゲ特有のぶつきらぼうな声で話し
続ける。雛田は目を丸くしたまま、パクパクと動く大き
な口を見つめていた。

19

《ハハハ。脅かしが過ぎたかな。正直に言うと、俺はも
ちろん影松豊本人ではない。人格コピーされた、いわば
クローンだ。人格クローンと称されることが多い》

「多いつて、僕は聞いたことがない……」

《機械音痴でパソコンすらろくに触れないお前には無縁
の話だろう。P A Iは日々進化している。世間で流通し
ている表向きの商品では電子的な愛玩動物でしかないが、
裏世界では数多くの技術オタクがしのぎを削り合ってい
る。その成果のひとつが俺さ》

カバは短い後ろ足で立ち上がり、短い両腕を広げてみ

せる。威張ってるつもりらしいが、カバはカバだ。

《人間の影松は、半年前にクローン生成ソフト『ジェミニⅣ』を手に入れると、P A I におのれの人格を転写するべく、気弱なカバの特訓をスタートさせた》

「なんでそんなことを」

《理由か？ 決まってるじゃないか。お前だって身体がふたつ欲しいと思うことがあるだろう？》

「じゃあ……」

《そうだ。ルーティンワークや、とりたてて判断を要しない事には、俺が本人に代わって対処する。そのために作られたのさ。なにしろお前と違って、最近のカゲはトイレに行く暇もないくらい忙しかったのでな》

初めの驚きが消えると、カバにお前呼ばわりされることが癪^{かん}に触り始めた。カバは顔色からそれとなく悟ったのか、フフンと嗤^{わら}って見せた。それがまたカチンとくる。

「……訓練は、どうやったんだ？」

雛田は精一杯、眼光を鋭くしてみる。

《訓練たって特別なモンじゃない。『ジェミニⅣ』を起動したままP A I のお相手をしてりゃ、それでO Kな
さ》

「会話しながら、相手の話し方を盗むわけか」

《話し方だけじゃなく、嗜好や考え方、その裏に流れる思想まで取り込まないと意味がない。突拍子もない話に

聞こえるだろうが、最新バージョンの『ジェミニIV』では、革新的な改良がなされ、人格転写は実用化に向けて格段に進歩したんだ》

「……それがお前というわけか」

《そう、俺だ。言つとくが半端じゃないぞ。カゲが直に相手のできないときは、胸ポケットの中から言動に耳を澄まし、テーブルの上から見えるものを記録していく。同時に分析作業をおこない、人格データベースへ順次格納していく。彼が就寝中でも、過去に出演したテレビ録画やラジオ録音を教材にして訓練を続けた。だから雛田、お前のこともよく知っているぜ》

「呼び捨てにするな。P A I のくせに」

さすがに我慢ができず噛みついてみせたが、カバは意に介した風もなくカラカラと笑った。その笑い声がまた影松そっくりなので腹が立つ。

《まあそう怒るな。そのうち慣れる》

「慣れたかアないね。だいいち違法じゃないのか？ P A I の知能を高めることは倫理的社会的に問題アリとして、有識者を交えた政府の審議委員会で、知能の向上に一定の制限がなされたはずだ」

《さつき言ったろ？ “裏世界”の話だと》

「やっぱり違法だ」

しかしカバは動じない。

《技術の進歩が速過ぎて、法律は追いついていない。それに商品化されてるわけじゃないしな。あくまでインターネットでやりとりされる範囲内だ。そんなことより》カバは身を乗り出した。もつとも携帯から離れることはできないが。《俺はむしろくちや役に立つたんだぜ》

「……どんな？」

聞きたくもないが。……いや、聞きたい。

《二ヶ月前、俺は満を持して表舞台にデビューした。実際にカゲ本人になりすまして電話の応対をやった。誰ひとり気づかなかったんだぞ。話し相手がP A Iとはな。ハハハ》

得意げに鼻息を荒げて立ち上がる。漫画なら「えっへん」というところだ。

《お前だってそうだ。昨日、お前の携帯に入れたカゲの留守電メッセージ——あれは俺様だ。俺の声だ》

「なんだと！」

怒りが沸点に達した。雛田はカバの横つ面を張り飛ばしてやろうと右手を繰り出したが、相手は実体のないホログラフィック映像である。手は虚しく空を切った。

《まあそんなにいきり立つな。俺は手も足も出せないんだから、口だけでも達者に動かさないとやってられないんだよ。勘弁しろ》

「うるさい、こうしてやる！」

雛田は両手で携帯を掴むと、力まかせにダッシュボードから抜き取ろうとした。しかしどこかが引っかかっていて、びくともしない。

《おいおい、壊さないでくれよな》

雛田は涙で目がかすんだ。悔しい。

数時間前に非業の死を遂げた相棒に対する気持ち、それを土足で踏みにじられたような屈辱感に覆われ、この野郎め成仏しやがれと怒鳴りながら、彼は両手で携帯を叩き続ける。カバの映像は上下にぶれ、目が回るからやめてくれと叫び声を上げる。

《判った判った。右上のボタンを押せばいいんだ》

言われたボタンを押すと、いとも簡単に取り外すことができた。電源スイッチを見つけると、すかさず指をかける。

《オフにするのは構わんが、お前、俺に何か訊くことがあったんじゃないのか？》

スイッチに触れた指が止まった。

「……教えろ」

《何を？》

「決まってるだろ！」

《そう噛みつくなんて。——ああ、間違いなく清香は、お前と碧の間にできた子供だ》

「証拠は？」

その時、アスファルトを小走りで近づく足音が聞こえた。

「おい、カバ公、話は後だ。よけいなことを言うなよ」
サイドウィンドウを清香が叩いた。

「誰と話してたの？」

「いやなに、コイツの相手をしてただけだよ」

雛田が携帯を上げてみせる。ピンクのカバは鼻の穴を広げながら、一声高く鳴いてみせた。

《フユウーン》

20

「いやーん、カワイイ！」

清香は花のような笑顔を浮かべると、カバに両手を差し伸べた。カバは彼女の手を舐める仕草をする。

「このコ、おじさまのPAI？」

「まさか。……影松のだよ」

「へえー。名前はあるのかな？」

「んーと—— “カバ松” だ」

一瞬、カバの両目が寄った。

「フフフ。よろしく、カバ松。でも持ち主がいなくなっちゃったね」

彼女に取り上げられでもしたら事だ。急いで言い足す。
「僕に所有権を譲ってもらったんだ。芸能人の電話番号
やアドレスなんかがいっぱい詰まってるからね。なあ、
カバ松？」

《フ、フユウ〜ン》

清香が指先でカバの鼻をはじく振りをする。

「そっか。おじさまがお父さんの跡を継いでくれるんだ
ね」

「そこまでは考えてないけど」

雛田は困ったように、言い淀む。

「それより、朝ご飯をいただきにいきましょ。結城さん
が用意してくださるって。一応、お父さんの弟だって伝
えたわ。ごめんね、説明が面倒だったから」

「いいさ」

雛田は清香に促されて、四駆を後にした。携帯はしつ
かりポケットに突っ込んで。

食堂は、スタジオの外見に似つかわしい、採光に富ん
だ、しゃれた空間を体現していた。朝食はプレーンオム
レツにトースト、そして野菜スープ。どれも美味だった。
食後のコーヒーがまた泣かせる味で、昨夜影松とふたり
で後にしたビル地下のバーを思い出し、不覚にも涙を落
としそうになった。

午前九時の時報が、どこかで鳴っている。

「馬鹿に静かだね。今はオフかい？」

「音楽にそんなのないわよ。三日前、わたしがここに来た時はミュージシャンやエンジニアでいっぱいだったのよ。ところが昨日のお昼頃、急にみんな出払っちゃったんですって。理由も告げずに。結城さんが首をひねってたわ」

箒を持った結城氏と話し込んでいたのは、そのことについてらしい。彼によれば、昨日の朝食タイムからスタジオ内の空気はおかしかったという。

「わたしは部屋に籠ってたので知らなかったんだけど」
彼らは一様に押し黙っていたかと思うと、隅に固まってひそひそ話を始めたり、一種異様な雰囲気に含まれていたという。結城氏がどうしたのかと訊ねても、誰ひとり要領を得た返事を返さなかったそうだ。

「なのに正午の時報が鳴った途端、それが合図みたいに全員荷物をまとめると、車に乗って出て行ったんですって」

奇妙な話だ。彼らに身に何が起こったというのだろうか。もしかや『長野防衛隊』事件に関連してるのか？ 判らない。いったいこの信州はどうなっちまったんだ！

清香は淡々と話し続ける。

「だから残ったミュージシャンはわたしだけ。元々、軽

井沢の空気が急に吸いたくなっただけで、予約も入れずに穂高から飛んできたのよ。あわよくばと思つてアルパも車に積んできたけど、到着したら案の定、予約はぎつしり。そりゃそうよね、このグラストンベリーは人気スタジオだから」

「今朝、君はコントロールルームにひとりでいたね？」
清香はため息をつく、テーブルの上に両腕で輪を作り、その中に顎を埋めた。

「左右逆になった携帯で、どうにかお父さんにメールを打ったら、後はひたすらお父さんの到着だけを待ってた。でも今か今かと待っているとだんだん落ち着かなくなつてきて、夜半に部屋から出たの。宿泊棟から表に出たら、月に照らされた駐車場が空っぽに近いのがすぐ判ったわ。どうしたのかなと不審に思つて、スタジオを覗いてみたらやっぱり誰もいない。怖いくらいシーンとしてる。でも今さら部屋に戻る気にもなれず、車からアルパを降ろしてスタジオに持ち込んだの。——アルパってね、一応は左右対称形だから弾けないことはなかった。でも何だかしつくりこなくて弾くのを止めちゃった。その後は昨年録音した曲を再生したりして、気分をまぎらせていただけ」

確かにこのスタジオは、昼間見るとすてきな立地条件だが、誰もいない深夜となると、寂しさもひとしおだろ

う。

あの時、清香の頬には涙の跡があった。思い出すと、その時感じた切なさがよみがえってくる。父性愛？

「たいへんだったな」

他に言葉が見つからず、既に空になっているコーヒークップを下ろすと、巨大なガラスで仕切られた前庭に目を転じた。芝生の上を千切れ雲の落とす影がゆつくりと動いていく。この分じゃ思ったより早く天氣が崩れそう
だ。

「おじさま」

「ん？」

「わたし、これからどうすればいいんだろう。……ううん、わたしにできること、何かあるかな」

清香がこれ以上ない真摯な眼差しで見上げる。たじろぎながらも、誠意ある答えをしなければと雛田は自らを叱咤する。

「君のお父さんはね。君を連れて一刻も早くここを脱出しろと言ったんだ」

「そんな！ 逃げるなんて――」

「聞きなさい」雛田は手の平を見せながら続ける。「今この長野は危険だ。よく判らないが不穏なことが次々と起こっている。……君が影松の、お父さんの仇を討ちたい気持ちは判らないでもない。僕だって同じだ。でも今

はその時期じゃない。ひとまず安全な場所に引いてから後の策を練ろうじゃないか」

「でもどこが安全かなんて——」

「清香！」

ビクツと彼女の肩が硬直した。別人を見るような顔で雛田を見上げている。

「……いいね？」

清香はハツと夢から覚めたように目を瞬かせた。まばた

雛田はバツが悪くなり、外の景色に目を移した。すると林の間から白と黒のツートンカラーの車が前触れもなく現れるのが見えた。それがパトカーであることに気づくまで若干の時間を要した。

パトカーに先導されるようにグレーの車が続く。二台は駐車場への道に折れることなく直進し、テラスの脇に停車した。

ドアが開くと、パトカーからふたりの警官が、後ろの車からもふたりの背広が地面に降り立った。

「何ごとだろう。単なる巡回にしては、ずいぶん物々しいな」

「ホントね。何だろう？」

雛田はイヤな胸騒ぎを覚えた。

分厚いガラスの向こうで警官たちは、広大なスタジオをどこから訪問すればいいのか迷っている風だったが、宿泊棟から結城氏が飛び出してきたのを見て、そちらに足を向けた。

刑事のふたりは、若手と初老といった組み合わせ。その後ろから、いかにも無骨な叩き上げといった、頑固そうな警官ふたりが付き従う。

初老の刑事がガラス越しに、鋭い視線を投げよこした。雛田の心臓が激しく飛び上がった。

「……僕かな」

「え？」清香が表に目を向けたまま顔を寄せる。

「高速道路の料金所を突破した時、警察だか機動隊だかが、占拠していた連中を包囲したんだ。僕たちはその直前に現場から逃走した。だから——」

「一味の疑いをかけられた？」

「可能性はある」

若い刑事が警官たちを代表して結城氏に話しかけた。

結城氏は意表を突かれたという顔をしながら、二、三度首を縦に振った。刑事はお愛想程度の笑顔を浮かべて、さらに何ごとか問いかけた。彼らの会話はまったく聞こえてこない。

「覚悟した方がよさそうだ」

雛田が椅子をがたつかせて立ち上がったのと、警官たちが結城氏を先導に食堂へと歩を進めたのが同時だった。扉が開く。外気が静かに流れ込んできた。芝生の上で動くスプリングラーの音がいやに大きく聞こえる。

不安げな結城氏を押しつけて前に出た若い刑事は、

「影松清香さんですか？」

と問うてきた。

（――？）

刑事の視線は自分ではなく、背後に向けられていた。雛田は混乱した。彼らの目的は清香？

「わたしですが……」

おずおずと腰を上げる彼女。その姿を認めた刑事たちの顔に、感に打たれたとでもいうような表情が走った。

おそらく彼らは清香が何者なのかも知らずにここへ来たのだ。すらりとした彼女の全身に目を走らせた若い刑事は、少しばかり相好を崩した。

「いやあ、あなたが影松さんですか。朝早くから失礼します。私どもは長野県警から参りました」

そう言って会釈した若い刑事は、短く刈り込んだ髪を撫で上げると、田村ですと名乗った。

（まるでヒットラーユーゲントを卒業したばかりのナチス親衛隊員だな）

初老の男も一步前に出て、成瀬ですと頭を下げた。歩

くたびにズボンのベルトが悲鳴を上げている。

（こちらはゲーリング元帥か）

残りの警官は名乗る機会を与えられず、入口に並んで立ち塞がった。

「影松豊さんは、あなたのお父様？」と田村が訊いた。

「そうですか……」

「さきほどお父様が東京都内の某所で発見されました。瀕死の重傷を負われていて、意識不明のまま病院へ搬送されたそうです。我々はあなたをお迎えするためにやって参りました」

雛田は「エッ」と声を上げた。ゲーリング成瀬刑事が、あなたはと問いかけてきた。

「影松の友人です……。しかし彼は死んだはずでは」

「ほう」成瀬の目が怪しいを光った。「どういうことですか？」

雛田は料金所で影松が暴漢に襲われ、それが致命傷になり、ここに到着する直前に亡くなったことを話した。成瀬の目はますます鋭さを増す。

「そりゃおかしい話ですな。我々が警視庁から受けた連絡とはまるで違う。影松さんは今朝事務所近くの公園で血を流して倒れているところを、偶然通りかかったサラリーマンに発見されましたな。現在、集中治療室で手術中だと、そう聞いておりますが？」

「まさか！ 彼は僕の目の前で亡くなっただけですよ」

雛田は叫ぶが、成瀬の表情は変わらない。

「では影松さんの御遺体はどこに？」

「そ、それは……砂になって、崩れてしまいました」

「砂あ？」

成瀬は田村親衛隊員と目を見交わすと、腹を揺すってカラカラと笑った。

「清香さん」田村が含み笑いをかみ殺しながら、馴れ馴れしく声を掛ける。「人間が砂になったなんて話を、あなたは信じたのですか？」

ハツとして雛田は清香を振り返った。彼女は言葉をなくしたように立ち尽くし、目を左右に泳がせている。

「だって、現に昨夜は山手線でも」雛田が言い募る。

「雛田さん——」成瀬が一転、地面を這うような低い声で雛田の発言を遮った。「思い出したよ、アンタ、かつて一世を風靡したカゲヒナタの片割れさんですか？」

片割れなどとは心外だがそれどころではない。ゲーリングは何を言いたいのか？

「いやなに、影松さんの羽振りの良さは、芸能ニュースに疎い私でも知ってますよ。元コンビだったアンタが芸能界で犯した失態もね。当時はずいぶんと面白おかしく報道されましたからね。あれは何年前のことでしたっけ。アンタもひとかたならぬ苦勞をされたことでしょう。お

おかた、元相棒さんに借金を申し出たが断られてしまい、腹いせに……といったところですか。ハハハ」

成瀬の底意地の悪い嘲笑が、雛田の肝を冷たい水に突き落とした。

「待ってくれ、そんなことはない。そんなはずはない」
食い下がろうとした雛田の腕を田村が横から掴んだ。

「どうやらあなたには詳しい話を聞く必要がありそうですね」

親衛隊員はそう言うのと、入口に控えた警官を手招きした。

（バカな！ 僕が逮捕される!?）

雛田はますます混乱した。自分は夢を見ているのか？

「待って、刑事さん！」

その時、清香の声がレストランに響き渡った。ふたりの刑事、ふたりの警官、雛田、結城氏の視線が一斉に彼女に注がれる。

清香は迷いのない足取りで雛田のそばに歩み寄ると、彼の二の腕に手を回し、毅然たる顔を成瀬に向けた。

「刑事さんにお訊ねします。わたしがこのスタジオにいることを、いったい誰からお聞きになりましたか？」

清香の声は居並ぶ男たちの耳の間を、鈴の音のように渡っていった。それは張りつめた空気を緩めるには至らなかったが、こめかみに汗を滴らせた雛田の緊張感を少しばかり解きほぐす役割を果たした。

しばらくたって成瀬刑事が返答した。

「申し上げたように、我々は警視庁から連絡を受けただけなので詳細は――」

「刑事さん、おっしゃいましたよね？ 父は意識不明のままだって」と清香は確認の問いを投げる。

「所持品の中に、お嬢さんのことが書かれてあったのかも知れません」

「携帯も財布もすべてこちらにあります。さつき雛田さんから貰い受けました」

「……………」

「それにわたしがこのスタジオを訪れたのは全くの気まぐれからで、レコード会社には一切連絡していません。友達にも教えていません。唯一伝えたのは父だけで、その連絡メールは携帯の中です。もっとも本人でなければ開くことはできないでしょうけど」

そういうことか。雛田はようやく合点がいった。

「さあ、そのあたりは何とも」

成瀬は言葉を濁す。雲行きが怪しくなってきたぞ。

清香ひとりに戦わせるわけにはいかない。雛田も意を

決して加勢の口火を切った。

「ずいぶんアバウトなことですね。早朝に通勤途中のサラリーマンが見つけたとのことですが、するとまだ二、三時間前のことでしかない。最近の警察はずいぶんと人探しが上手いんですね」

少々口がまわり過ぎたか、成瀬と田村の表情が陰悪の度を深める。しかし今さら引き下がれないぞ。

「まあ、ご親切にも警察のかたがわざわざ来てくださったのだから、お礼を申し上げないといけないね」

と、刑事たちの目を避けて清香に話しかける。その時、雛田は彼女が震えていることに気づいた。彼を掴む腕に爪が食い込んでいる。

（長引かせたくない。そろそろケリをつけよう）

雛田は軽く咳払いすると、

「刑事さん、私どもに思い違いがあったようです。私は最近ちよつとノイローゼ気味でして……。影松が生きているなら、彼女を連れて、急ぎ東京に向かおうと思います」

そう言つて、清香の腕を引きながら歩き出したが、刑事たちは壁のように立ち塞がったまま動かなかった。

「雛田さん、だからそうはいかないんですよ。清香さんは我々が東京まで護送します」

「その必要はありません」清香が答える。「自分の車が

ありますから」

「それはダメです」成瀬は即座に否定した。「ここんとか、長野の治安は良くありません。お嬢さんひとりで行かせるわけにはいきません」

「だから私が連れて——」と雛田が言いかけると、

「アンタ、記憶力ないのか？」田村が吐き捨てるように言った。「アンタには署まで来てもらうつつてんだろうが！」

若造め、いよいよ親衛隊の顔をむき出しにしやがった。雛田はビクつきながらも睨み返した。

「こちら、ヤクザみたいに民間人を恫喝^{どっかつ}してはいかん。……そんなわけですから、お嬢さんには我々警察が同行して、無事東京までお送りします」

成瀬は言い終えるや、手を振って警官を呼んだ。これ以上の議論は無用ということらしい。

雛田は両側からふたりの制服警官に挟まれると、抵抗する気力が萎えていくのを感じた。ここまでか……。

「身の回りのものだけ、お持ちください」

田村はキザな笑顔で宿泊棟へと清香を促す。彼女は不安な眼差しを雛田に送りながら、イヤイヤ扉を出て行く。雛田は唇を噛みながら、それを見送る。

（清香の僕に対する信頼には一点の曇りもない。なんとかあのコの気持ちに報いたいが……）

しかしどうやって？

と、その時――。

《ブルルル》

雛田の携帯が上着の内ポケットの中で振動した。

「出てもいいですか？」

携帯を取り出しながら、いかめしい顔の警官に訊ねると、警官は開いた扉でズボンをずり上げている成瀬によるらしいですかと伺いを立てた。成瀬は構わん構わんと気のない返事をしながら宿泊棟を見つめている。

雛田は首を傾げた。重傷の影松が東京で発見されたという情報は明らかにガセだ。そのガセネタに乗って警官たちがわざわざやってきた。彼らの目的はどうやら清香の確保にあるらしい。

ナゼだ？

広がる疑惑を抱いたまま、受話口を耳にあてる。

「はい、雛田です」

《俺だ俺だ》

「カ――」

相手はピンクのカバだった。

《おっと何もしゃべらなくていいぞ。話はずっと聴いていた。まさにピンチだな。ハハハ》

「喜ぶな！」 小声でささやく。

《まあそう噛みつくな。俺に考えがある。耳を貸せ》

「あとで返せよ」

一瞬、往年のカゲヒナタのやりとりが、雛田の脳裏をかすめた。

23

通話を終わるのと、清香が小さなりゅっくを肩にかけて戻ってきたのが、ほぼ同時だった。

「ワシらはこのまま東京へ行くから、君たちは雛田さんを署の方にお連れしろ」

成瀬が警官らに指示する。警官らは敬礼を返した。

近くで見ると、警官はふたりとも二十代前半といった若造だ。

「雛田さん、いずれまたゆっくりお話しましょうや」

勝ち誇ったように言うと、ゲーリング成瀬は太鼓腹をゆらゆらさせながら車へと乗り込んだ。彼の隣には清香が神妙に座っている。親衛隊員も運転席に乗り込んだ。

（クソッ、彼女を連行、いや拉致されるがままでいいのか、阻止する方法はないのか！）

フロントウィンドウ越しに、雛田と清香の目が合った。雛田は渋い顔のまま、ウインクして見せた。それをどう受け止めたのか、清香はわずかに頷いてよこした。

「君は後ろの車に乗るんだ」

警官のひとりが雛田の背中を小突いた。

「あつ」と雛田は小さく叫んだ。

「どうした？」と警官。

「荷物をスタジオの中に置いたままなんです。取りに行ってもいいですか？ 財布から何から一切合切入つてますもんで」

もちろんウソだ。荷物は全部四駆の中にある。

台詞はカバ松の受け売りのまんまである。

警官はしょうがないなという顔をしたので、雛田はすみませんと頭を下げ、奥へ通じる廊下へと歩き出した。警官たちも付いてくる。その間に清香を乗せた車はUターンすると、森陰の方角へと走り去って行った。

スタジオの重い扉を開いた雛田は「どこかなあ」とあちこち鞆を探すふりをして、机の間を歩き回った。

逃亡を恐れてか、警官Aは入口に、警官Bは彼のすぐ後ろに張り付いている。

「おかしいなア。見あたらないなア」

元々ないものを探しているのだから見つかるはずもない。警官たちがシビレを切らし始める。

「まだか？」

「ハア、どうも」

適当な相づちを打ちながら、雛田は手に持つ携帯を周

囲にかざした。

「どうだ？」雛田が小声でささやく。

《んーと、あそこが良さそうだ》とカバ松。

「何をブツブツ言うておる！」と警官B。

「いえ、探し物はここにはないみたいで、勘違いだったようです」

「思い違いやら勘違いやらが多いんだな。ボケてんじゃないのか？」露骨にいらだちを見せる警官A。

ムツとする雛田。しかしそれをこらえつつ、

「たぶん、乗ってきた車の中だと思います」

「……もういい、出ろ！」

そう言つて警官たちが背中を向けた瞬間、それを待っていた雛田は、隣室に続く半開きの扉の中に、携帯を放り投げた。

ガコーン、カラカラカラ。

「あん？」振り返る警官A。

「今の音は？」戻ってくる警官B。

《……てくれえ。助けてくれえええええええ》

ふたりは互いに顔を見合わせた。

《……助けてくださあぁあぁい。影松豊ですううう。手足を縛られてココに閉じ込められてるんですううう》

「何だと！」「どこだ？」A & B。

《ココですううう。扉の中ですううう》

（名演技だな、カバ松）

雛田もP A Iだと知らなければ、本物の影松がそこにいると思っただろう。

「カゲ、カゲなのか？」

ボートとしてるわけにはいかない。彼も空気を読んで演技する。

彼が携帯を放り込んだ部屋は、デジタルテープや消耗品、備品などを置いておくための小部屋だった。狭くはないが、組まれたアングル棚がいくつも並んでおり、電灯をつけても奥まで見通すことはできない。

「どこだー」

《一番奥ですう》

三人は備品室に足を踏み入れた。

警官たちは腰の拳銃に手を当てながら、へっぴり腰で前に出る。おっかなびっくりという足取りである。

今、ふたりの警官は前にしか注意を払っていない。雛田はスツと身体を動かすと、ふたりの後ろに廻った。そして音を立てず、備品室から出ると、急いで扉を閉めた。

「コラッ、何の真似だ？」警官A。「開けんか！」

「おい、奥には誰もおらんぞ、どういうことだ？」

中からわめき声が聞こえる。雛田はそばにあったモップを取っ手に引っ掛けた。これでしばらくは出てこれる。

「出せ！　出さんと逮捕する！」

（やれるもんなら）

雛田はきびすを返した。

「今さらあの娘を追いかけても手遅れだぞ！」

コントロールルームを出ようとした雛田は足を止めた。備品室の扉に駆け戻ると、ドンと力いっぱい殴りつけた。

「手遅れとはどういうことだ!？」

しかし中からは沈黙しか返ってこない。

雛田は駆け出した。

急ごう。急がねば清香を乗せた車が遠くへ行ってしまう。どこかで奴らに接触し、彼女を奪還するんだ。

奴ら——警察の手から？

自分は、国家権力に戦いを挑もうとしているのか？

——だが問題は敵が誰か、ではない。守るべきは清香だということなのだ。それだけだ。

そのためにカバ松がおとしり囚になつてくれたんじゃないか。

何としても彼女を危難から救出せねばならない。

四十五歳、雛田義史の大勝負だ。

雛田の革靴がドタドタと床を踏み鳴らす。

長年の運動不足は、知らず知らず彼の身体から持久力というものを容赦なく削ぎ落としていた。レストランに駆け戻り、建物の外に飛び出そうとしたところで、椅子のひとつに足を引っかけ、勢い余って転倒してしまった。「だ、大丈夫ですか？」

最前からそこに立ち尽くしていたエプロン姿の結城氏が助け起こそうと手を差し出す。

「――平気です。僕には使命があるんです。今しがたできました。敵の魔の手から清香を救い出さねばなりません！」

「敵……？ ひょっとしてさつき来た警察のかたがたはニセモノですか？」

「いや、そういうわけではないでしょうが……詳しい話は後です。行かせてください」

雛田は表に飛び出した。

太陽はすでに灰色の雲に覆い隠されていた。遙か遠くで稲妻が空を斜めに疾駆した。空気のおいも変化している。雨が近い。

四駆は静かに彼の帰還を待っていた。

キーを差し込み、エンジンを始動させる。

「待ってろ、清香」

アクセルを踏み込み、車は発進する。

駐車場を出ようとした時、結城氏が車の前に飛び出し

てきた。

あわててブレーキを踏む。

「危ないじゃないですか！」

「雛田さん」結城氏は四駆のボンネットに両手を付きながら「あなた、警察の車を追いかけるのでしょうか？」

「そ、そうです」

「だったら裏道を行ったほうが速い。舗装されてはいませんが、かなり近道になります！」

結城氏は正規の道路とは反対側、宿泊棟の先を指差した。

「恩に着ます！」

雛田はハンドルを右に切ると、わずかに見える樹々の切れ目に向かって四駆を突進させた。

「ここらでいいだろう」

成瀬が声を掛けると、田村は緩やかにスピードを落とし、道路脇のコブシの木の下に車を止めた。

「田村、毛髪検査の結果は？」

「クロでした。検体を換えて三度検査を行いましたので間違いありません」

成瀬は軽くため息をつき、清香に顔を向けた。

「お嬢さん、申し訳ないが車を降りていただきたい」

「どうして？」

清香は訊ねたが、ふたりは答えずにドアを開き、それぞれ地面に降り立った。

こんな林道の途中でどんな用事があるというのか？

「お嬢さん、ひとつだけ教えてあげましょう」成瀬は胸ポケットから取り出した煙草に火をつけると、おもむろに口を開いた。「我々はね、警察である以前に、長野防衛隊の隊員なんですよ」

（――びっくりした）

冗談ではない。雛田は本当に心臓が止まるかと思った。それは裏道などというものではなく、山道、ケモノ道と言つてもいい代物だった。

勢い良く飛び込んだものの、落ちていた枯れ木にハンドルを取られて危うく川に落ちそうになったし、高低差の激しい路面は悪路そのもので、スピードを上げることができない。

（とにかく、四駆で来ていて良かった）

道にはみ出した無数の枝葉がボディをキイキイと擦る。^{こす}右を覗けば、いつの間にか川が谷底に変わっている。暗くて底は見えないが、落ちたらひとたまりもなさそうだ。（とにかく急ぐんだ。奴らが町中に出る前に）

雛田は必死でハンドルを切り続けた。

「お嬢さんは『リアル』と呼ばれる立場、というか存在なのだそうだ」

「リアル？」

林道から分け入った細い道を三人は歩いていた。清香を先頭に、田村、成瀬の順で続く。田村は手に銃を構えている。

「難しいことは判らんが、要するにお嬢さんは、長野を今震撼させておる細菌兵器の『保菌者』だという話だ。

お嬢さんがさつき荷物を取りに部屋に戻った時、この田村にお嬢さんの部屋に落ちていた髪の毛を数本採取させたんだ。それを我々の検査機に掛けたところ、陽性の反応が出た。つまりお嬢さん、あなたは『歩く細菌兵器』というわけだ」

「そんな！ 身に覚えがありません」

清香は憤慨したが、田村の向ける銃口に背中を押され、しかたなくまた歩き始める。

「覚えはあるだろうが？」成瀬は鼻で笑いながら、内ポケットから携帯を取り出し、録音メモリーの再生ボタンを押した。

《おじさまが来てくれたので、もう大丈夫。……うん、わたしね、鏡の国に迷い込んだみたい。この世界がみんな裏返ってしまったの。信じられないでしょう？》

清香の顔面が真っ赤に染まり、頭に血が上った。肩を

怒らせて振り向くと、

「盗聴したのね。犯罪じゃないの！」

しかし次の瞬間、背中に悪寒が走った。

「——判ったわ、衛星を使っただのね。携帯からわたしのいる場所を割り出したんでしょ!？」

成瀬は大げさに頷いてみせた。田村も不敵な笑顔を浮かべつつ、あくまで銃口はそのままだ。

「どうしてそんなこと——」

「だから言っただろう。お嬢さん、あんたは危険人物なんですよ。あんた、自分の目に映る世界の右と左が逆転したんだろ？　今や我が国は静かな非常事態宣言が発令されていて、携帯の会話はすべてコンピュータでリアルタイムに録音、検索、解析がなされている。お嬢さんの場合は“鏡の国”が検索に引っかったんだよ」

「成瀬さん、もういいでしょう」田村が口を挟んだ。

「早いとこ始末しちまいましょうや」

25

成瀬が頷くのを確認すると、田村は改めて銃を握り直し、筒先を清香のひたいへと向けた。

「悪く思わんでくれよな。県民を守るためなんだ」

パーンッ。乾いた音が轟いた。引き金はいとも簡単に

引かれてしまった。

が次の瞬間、田村と成瀬は、ふいに辺りに満ちた真っ白な光に、あわてて両目を覆った。

「うわっ！」

錐きりのように脳髓の奥まで突き刺さってくる光。それは現れたときと同様、突然消滅した。

成瀬は指の間から周囲を見渡した。生い茂る樹々が何ごともなかったように風にそよいでいる。

遠雷の不気味な音が、遙か空の彼方から聞こえてきた。

「……落雷か？」と成瀬。

「まさか。ずいぶん距離がありますよ」と田村は否定した。

しばらくして、ふーっと一息吐いた成瀬は、カラマツの根元に横たわる清香を認め、近寄って彼女の顔に手をかざした。

「まだ生きてる——ん？」

成瀬の眉がおや？という形をした。彼女のひたいに差す、うつすらとした赤みに気づいたのだ。

——これは何の痕だ？ 当たった銃弾が跳ね返った……わきやないな、鉄腕アトムじゃあるまいし。しかしさっきの光はこの娘から発せられたような……錯覚か？ 成瀬は首を振ると立ち上がり、胸のホルダーから自身の銃を抜いた。狙いを清香の眉間に合わせる。

「……うーん」

身体をよじらせて気絶から目覚めようとした清香は、顔の真上で構えられた黒い物体に、驚愕に目を見開いた。「すまないな、お嬢さん。すぐ済むからね」

この距離なら確実だ。若い娘を銃殺するなど決してやりたいことではないが、おつとめとあらばしかたがない。成瀬は心の中で両手を合わせつつ、指にぐつと力を入れた。

ガタン、ドン、ズズン、ブワン。

——何の音だ？

成瀬の集中力をかき乱すように、そのけたたましい音はしだいに近づいてきた。——車だ。

雛田は自分が今どのあたりを走っているのか見当がつかなかった。逆落としのような急斜面の連続はもはや道路とは呼べず、すぐ横で口を開いている暗い谷間を避けるだけで精一杯だった。

「ゆ、結城さん、恨むぞおおおお」

四駆のタイヤが岩を噛んだ。アクセルを踏み込んでどうにか乗り越える。

その時だった。山中にはおおよそそぐわない色彩が目の隅をよぎった。ほんの一瞬のことだったが、緊張で研ぎすまされた雛田の想像力は、瞬時に清香の着衣を彼に想

起させた。

雛田は直感を信じた。ハンドルを切らず、そのまま真正面から樹々の中に突っ込んで行った。

「あッ、ホントにいた！」

それはやはり清香だった。彼女のタンクトップだった。横にいるのはゲーリングじゃないか！ 銃を持っている。その奥に親衛隊員もいる。なぜこんなところに？

刑事たちは予想もしなかった車の出現に驚き、二、三歩後退した。しかし運転手が雛田だと認めると、すかさず銃で撃ってきた。

「うはっ！」

フロントウィンドウにヒビが走る。バックミラーがもげる。ライトは飛び散り、ボンネットが変形した。

彼はたまらず首をすくめた。だがハンドルから手は離さない。アクセルをベタ踏みしたまま、降り注ぐ銃弾をかいくぐってひたすら前に進む。

車体にめり込む弾丸が激しい音を立てた。まったく生きた心地がしない。だが頭の中にあるのはただひとつ。清香を害する者の排除。それ以外には何もない。

車体の揺れがスッと消えた。平地に降りたのだ。

顔を上げると、ふたりの刑事がすぐ目の前にいた。大声で吠えている彼らの銃口は、まっすぐ雛田に向けられていた。

「南無三！」

最後の銃声がこだましたのと、四駆が鈍い衝撃を受けたのが、ほぼ同時だった。

そして車内は奇妙な浮遊感に包まれた。

それが自由落下だと気づいた時はすでに遅かった。四駆は雛田を乗せたまま、前のめりに谷底へと吸い込まれていった。

26

あらん限りの声が雛田の喉からほとばしり出た。黒い水面はみるみる近づき、激しい衝撃と共に、彼の身体を鯨のようにまるごと飲み込んだ。

ざぶーん、ごぼごぼごぼ。

周囲は真っ暗闇。何も見えず、呼吸もできない。恐怖にとらわれた彼はやみくもに手足をばたつかせた。しかし彼を押し包んだ水は身体にねっとりとはばりつき、しだいに彼の自由を奪って行った。

（ここまでか——！）

もがき疲れ、意識がスーッと遠ざかっていこうとした、その時、

——おじさまーっ。じさまーっ。さまー。まー。

清香の声が幾重にも反響して彼の耳に届いた。

（清香！ 無事だったのか！ どこにいる、どこだ？）

「どこだあああ！」

雛田は自分の声で目を覚ました。彼の自由を奪っていたのは運転席いっぱいに広がったエアバッグだった。

「おじさまーっ！」

清香の声は夢ではなかった。雛田は声のする方へと身体をねじった。

「あたたたっ」

激痛が全身を駆け抜ける。エアバッグがあつたとはいえ、かなりの衝撃を受けたようだ。じつと痛みの収まるのを待つ。しかし、おかげで頭がハッキリしてきた。

目を開いた雛田は、周囲の状況にしばし呆然とした。

四駆は鼻面を真下にして、谷底に突き刺さっていた。

辺りはさほど暗くない。谷底を流れる水の量も、足先が浸る程度の浅いものだった。

彼はシートベルトを外し、半ば外れそうなドアを蹴破ると、エアバッグと座席の間からどうにか這い出した。

ジャブンと水滴が跳ねる。安物の革靴を通して、流れる水の冷たさが伝わってくる。

頭上を見上げる。数十メートルも落ちたような気がしたが、実際の落差は五メートルほどだった。

彼は車の水に使っている辺りを見た。そこに四駆の下敷きになって横たわる田村刑事の変わり果てた姿があっ

た。おそらく即死だったろう、すでに全身が砂の塊と化しており、半分以上が水の流れに崩され、流されていた。雛田は手を合わせようとして、ハツとなった。もうひとりの刑事はどうした？

「おじさまっ、無事ー？」

頭上から清香の声が降ってきた。見上げると彼女は蔓草をロープ代わりに使いながら、鋭い斜面を器用に降りてくる。さすがはこの長野で、男の子顔負けの自然児として育っただけのことはある。

雛田はあわてて声を返した。

「来ちゃいけない。もうひとりの刑事が――」

「俺のことか？」

くぐもった声がどこからともなく返ってきた。雛田はぎよつとして身構えると、車を背に油断なく辺りに目を配った。

「おじさま、おじさま」

清香が小声で呼ぶ。リアバンパーに足が届くところまで降りてきた彼女は、蔓草を片手に、安定を確保すると、もう一方の手で足許を指差した。雛田からは反対側、車の向こう側。そこに成瀬がいるらしい。

右のバックミラーはすでに跡形もなかったが、左のそれは健在だった。雛田は背伸びして覗き込む。

いた。成瀬刑事は手足を蔓草に絡ませ、逆さ吊りの状

態でミラーを睨み返していた。

雛田は車の陰を出ると、彼の前に立ちはだかった。

毒のある言葉をさんざん投げ散らしていた刑事は、見るも無惨な姿をさらしていた。ネクタイはちぎれ、上着は左腕しか残っていない。そして空を向いた左足には――鋭利な切っ先をドス赤く染めた木の枝が貫通していた。「チクショ―、ざまあねえぜ。民間人にこうまでしてやられるとはな」

彼の手に銃はなかった。それどころか、巨大な蜘蛛の巣にひっかかった羽虫のように、彼はまったく身動きができないでいた。

「アンタのせいで長野は――この日本は終わりだ」

吐き捨てるように言い、成瀬はゲホツと吐血した。いつの間にか、雛田の横に降り立っていた清香は、ヒツと小さな悲鳴を上げた。

「いったい何のことを言ってる？」

「……まあいいさ、いずれ判る時が来る。その娘がこの世界に与える災厄の大きさに震え上がるがいいさ」

悪魔のような笑みを浮かべた瞬間、成瀬の身体がズルリと滑り落ちた。太股に刺さった枝の部分から、左足がちぎれたのだ。

「見るな！」雛田は清香の前に手をかざしたが、彼女はしっかりと見ていた。

「大丈夫よ……大丈夫」

真っ青な顔をしつつ、清香は気丈に目を逸らさない。枝の上に取り残された左足も、やがて成瀬の後を追うように落ちてきた。ちぎれた箇所から砂煙が舞い上がる。「へへ、砂になると痛みは感じないんだな。神様も粋な計らいをするもんだ」

成瀬は強がるが、川に浸った身体から少しずつ砂粒が流れ出している。

「あばよ。あの世で待ってるぜ……」

やがて彼の肉体は、五分と経たないうちにこの世から消え失せた。

雛田と清香はまじろぎもせず、浅い川底を見つめていた。そこには銀色の手錠が鈍い光を放ちながら沈んでいた。

「……お父さんも、あんな風に砂になったのね」

「——ああ」

頭上がチカチカと光り、激しい雷鳴が轟いた。

（ひとまずピンチを脱したか）

安堵の吐息をつく、雛田はドツと疲れを感じた。

「怪我はなかったかい？」

「ええ、わたしは平気。おじさまは？」

「関節があちこち痛いけど、なんとか……」

首筋に手をあてがった雛田は、その感触に違和感を覚

え、ぎよつとした。ゆつくりと手のひらを開くと、そこには血にまみれた砂があつた。

「ワ……ワ……！」

まさに銃創による傷。幸運にも避けることができたと思つていたのに、成瀬の放つた銃弾は彼の首をえぐるようにかすめていたのだ。

「おじさま、どうしたの？ ……キャツ！」

事態に気づいた清香も悲鳴を上げた。

首筋の傷はますます広がり、砂になつた皮膚がこぼれていく。手で押さえようと試みても、いっしょに流れる血量も半端ではなく、彼の意識はしだいに遠のき始めた。
（僕はここで死ぬのか？）

姿勢を崩した雛田を抱きとめた清香が叫んでいる。しかし朦朧もうろうとした耳では何も聴き取ることができない。

（清香、君に告白することがあるんだ。君の父親は、本当の父親は——）

しかり彼の口はアワアワと無意味な言葉を漏らすばかりだった。

27

天上から一筋の光が差し込んだ。

雛田の身体は、まるで神の祝福を受けたようにまばゆ

く光り輝いた。首筋から舞い上がる砂の一粒一粒が真珠のようにきらめき、彼はその中に四十五年にわたる人生の一コマ一コマを覗き見る事ができた。

同じ志を抱いて上京した影松豊。彼と共に過ごしたカゲヒナタとしての激烈な日々。そんな中で唯一の甘い思い出を作ってくれた碧。自分の人生はこのふたりとの出逢いがすべてだったと言つていい。

——そして、清香。

君の父親として過ごせたのは、たったの数時間だったけど、いまわの際に貴重な機会を与えてくれた神に……いやカゲに感謝したい。

清香は僕と碧だけの子供ではない。カゲ。おまえと三人の子なのだ。

清香、そんなに泣かなくてもいい。僕は苦しんだりはしていないから。もう少し君の顔を見ていたかったけど、だんだん目がかすんできたよ。

こんなところに君を置いていく僕を許してほしい。

《怪我だけはするなよ！》

カゲの最期の言葉を思い出す。すまん。

でも僕は限界を超えるぐらいがんばったよ。どうか勘弁してくれ。

カゲの言葉、彼はいつも僕を励ましてくれた。そういやカゲヒナタの全盛期、アイツは何度も褒めてくれたな。

《まったくお前の話芸だけは予測不能だよ。いつかその笑いが世界を救ったりするんじゃないのか?》

ははは。笑いや世界はともかく、娘を救うことはできただから人生の締めとしてはまずまずだろう。

身体が軽くなってきた。周囲の空気が暖かみを増す。いよいよお迎えが来たらしい。

中途半端だったけど、そんなに悪くない人生だった。さよなら。

ども、ありがとうございました〜〜。

雛田の体重を支えきれず、清香は折り重なるように水の上に倒れた。飛び散る砂は谷間を吹き抜ける風にあおられて、渦を巻きながら拡散していく。

彼女はそれでも雛田を抱きかかえたまま、徐々に形を失っていく彼の首筋を押さえ続けていた。

「ダメ、散っちゃダメー!」

清香は目を閉じて、必死に念じた。神様お願いです。

お父さんばかりか、雛田おじさままでわたしから奪うようなことをしないでください。

念じながら、いつしか清香はメロディーを口ずさんでいた。ステージの上でいつもラストソングに選んでいる曲だ。

彼女の腕は大切なアルパを奏できるように雛田を抱いた。

指先は、コンサートの中ならいつもそうであるように心地よい熱を帯び始めた。

清香が歌っているあいだ、雷鳴は一度も鳴らなかった。

灰色の雲の底が破れ、とうとう雨が降りだした。

雨はやがて激しさを増し、折からの強風と相まって、軽井沢を洗濯機に放り込んだ衣類のように翻弄した。同時に、漂っていた不吉な暗い翳^{かげ}をきれいに洗い流し、三時間後、再び陽光を浴びた草木は、何ごともなかったように光合成を再開した。

一枚の葉をつたった水滴が、谷底にいる清香の頬を叩いた。彼女は眠りの森の美女のように、百年の眠りから目覚めた心持ちでまぶたを開いた。

せり出した下草のわずかな隙間から、太陽の陽射しが彼女の瞳を射ている。もう正午なのだ。

増水した谷川の水は、横たわる彼女の胸の辺りにまで迫っていた。

清香はゆっくりと身体を起こした。しかし腹の上に不自然な重みを感じ、川底についた膝を滑らせた。彼女にのしかかっていた物体ははずみでずり落ち、そのまま水の中に没した。

……

「ぶはぁーっ」

水面から飛び出した雛田は、口や鼻や耳から勢いよく水を吐き出した。

「し、死ぬかと思った！」

「おじさまっ!?」清香が目を見張る。

「あれ……？　僕は——死んだんじゃ？」

自分の首筋に手を当ててみる。ひりつく痛みがあり、腫れてはいるが、ちゃんと皮膚が付いている。

あわてて周囲を見渡し、四駆の残ったほうのバックミラーを発見すると、立ち上がって水の中を駆け寄り、首筋を鏡に映してみた。

意外なものがそこにあつた。手の型だった。

「これは——」驚きの顔を清香に向ける。「君の手なのかい？」

清香も戸惑いと驚きの入り交じった顔で、自分の手のひらへと視線を落とす。

彼女の手のひらは、まるで一千回の拍手をしたあのように真っ赤に腫れ上がっていた。

28

ふたりは抱き合つて互いの無事を喜び合った。

どうやってあの瀕死の状態から復活することができ

たのか。雛田は清香が魔法を使っただと言い、清香は“鏡の国”の法則に自分が受け入れられたのと言った。どちらも自分の主張を信じているわけではなかったが、今はとにかく生きていることを感謝し、生きていることを無償で喜んでくれる相手が目の前にいることに感謝した。

雛田は、自らの最期を覚悟した時、心の中でさんざん格好をつけ、能書きを並べていたので、いざ助かってみると気恥ずかしさに消え入る思いがしていた。あしたのジョーが最終回の後、ニコニコと遊園地へ遊びに行ったりするか？ 山に帰ったアルプスの少女ハイジが、物にあふれたフランクフルトを懐かしがったりするか？（そんな続編があつたら許せるか？）……つまりは、ええと、そういうことなのだ。

恥ずかしついでに、彼は言いたいことを言ってしまうことにした。

「なあ、清香ちゃん、話しておきたいことがあるんだ」「しっ！」

清香の手が雛田の口を塞いだ。するとはるか頭上から、人声や足音が聞こえてきた。亡くなった刑事の名を呼んでいる。

「……ひとまず逃げましょう」「そうだな、そうしよう」

雛田はまた、父の名乗りをするチャンスを逸した。

清香は先頭に立って、谷川を上流へと登っていった。

途中、巨岩が行く手を阻んだり、つるつる滑る苔こけが密集していたりと足場に苦労したが、彼女は垂れ下がるツタや木の根を使つて身軽に越えていった。雛田も見よう見まねで必死に付いていく。

目指すはグラストンベリー・スタジオだ。

「あぶなくないかな？ 僕は警察をだまし討ちにしたんだ。見つかったら間違いなく逮捕だよ」

「まあ、まかせといって」

清香は小さな支流に進路を取り、手頃な場所で岩の上にひよいと飛び乗ると、懸垂けんすいの要領で崖の上に這い上がった。

「やれやれ」

雛田も重い身体にムチ打って、彼女のあとに続いた。

清香は道のない斜面をどんどん進む。まるで自宅の庭を散歩しているような足取りだ。

グラストンベリー・スタジオはもともと彼女の母親がプライベート用として建設したスタジオが前身になっている。この辺の地形に勘が働くのも、自然児清香としてはごくごく当たり前のことなのだろう。

夕暮れが近づいた頃、スタジオは突然目の前に現れた。
「見て。パトカーがないわ」

そのとおりだった。雛田が幽閉した警官たちは、どうにかして外に出たらしい。

清香と雛田は忍び足で宿泊棟に近づくと、裏口の扉を開けて屋内に侵入した。

「清香さんじゃないですか。ご無事でしたか」

厨房にいた結城氏が驚きの声を上げた。結城氏の奥さんや息子さん（コック見習いらしい）も出てきて、みんな清香の無事を涙を流さんばかりに喜んだ。

結城氏によれば、備品室の警官たちは扉に向かって銃弾を発砲し、強引に蹴破ると、自分たちの失点を取り戻すべく、あわててパトカーで行ってしまったのだという。

雛田はひとり、スタジオのコントロールルームに入り、問題の備品室に足を踏み入れた。ディスクや磁気テープなどが床に散乱している。

「カバ松、いるか？」

小声で呼びかけると、

「うおーい、ここだここだ」返事はアングル棚と床のあいだから返ってきた。ピンクの尻尾がかりうじて見える。「待ちくたびれたぞ。まったく生きた心地がしなかったぜ」

「PAIがいつぱしの口をきくんじゃねえや」

それでもカバ松のおかげで清香を奪還できたのは事実だ。雛田は不本意ながらも、礼の言葉を口にした。

「言葉の礼なんぞ、屁の突っ張りにもならん。それより腹が減った。早いところ充電してくれ」

口調はあくまで影松豊そのものだった。

「またきつと帰ってこられますよね？」

車窓越しに、結城夫妻と清香はお互いに名残を惜しんだ。雛田は気が気ではない。警官たちが今にも戻ってくるかもしれないのだ。それとなく清香をせかすと夫妻は不承不承、彼女の手を離れた。

雛田と清香はパジェロミニに乗り込んでいた。ハンドルは結城夫妻の息子が握っている。

清香が逃亡したことを知れば警察は彼女の行方を追うだろう。駐車場からレガシイが消えていれば手配書がまわるかもしれない。それを考えれば愛車はここに残していくしかない。

「ご安心ください。お車もアルパも責任を持ってお預かりしますから」

結城氏は快く愛用品の管理を引き受けてくれた。

パジェロは発進した。そのまま裏道の入口へと進む。

「げっ！ あのだは遠慮したいな。まともに走れたもん

じゃないし、さっきの場所に出てしまおうぞ」

清香はそれを聞いて、くすくすと笑った。

「おじさま、きつと道を間違えたのよ」

「まさか!? 真つすぐ降りてったんだぞ」

パジェロは裏道に入り、百メートルほど行つたところで、九十度左に折れた。

「そ、そんな——」

「この時期は葉が茂っていて、ちよつと判りづらいんです」大学生の息子にはにっこりと微笑む。

「でも間違えてくれたせいで助けられたんだものね」

清香はにっこり笑った。雛田はこれまでのツキのなさは、この日のために貯金されていたんじゃないかと思つた。そうに違いない。それでこそ人生だ。

路面はなだらかで、車体は大して弾むこともなく樹々の間をゆつくりと降りていく。

「停めて」清香が言つた。

そこは小さな丘で、ぐるりと遠景を一望することができた。清香は乗せてきた砂袋を抱えると地面に下ろす。

雛田は結城氏に借りたスコップで、適度な深さに地面を掘り、砂袋を丁重に穴の中へ収めた。

埋め直すと雛田はコブシ大の石を上にした。石は夕陽を浴びて燃え上がり、彼にエアーズロックを連想させた。

ふたりは無言で手を合わせた。結城氏の息子は何も訊かずに、じつと待っていた。

陽がとつぷりと暮れてしまう直前、パジェロは街中に到着した。そのまま西へと向かい、清香の実家のある穂高町に入った。

ここでふたりは清香の母、碧の車に乗り換えるつもりだったが、結城氏の息子は予想外の提案を申し入れた。自分の車をそのまま乗って行ってくれていいというのだ。「逃げるなら足のつかない第三者の車がいいんでしょう？ 僕は松ちゃんの、いえ清香さんの大ファンですから、お役に立てるのなら」

清香が感謝を込めて彼をハグした。息子はあられもないほど顔を朱に染めた。

手を振ってパジェロを見送る息子を残し、清香と雛田は再び車を発進させた。すでに時刻は午後八時をまわっていた。

「結城さん一家には足を向けて眠れないな」

「春先から秋口まで、ずっとスタジオにいてくださるの。人当たりが良くって居心地がいいから、レコーディングの予定がなくても、ペンション代わりに宿泊する人がいるくらいよ」

雛田はうなずく。

「エンジニアやらスタッフの人間までいなくなったのに、よくぞ残ってくれていたものだね」

「携帯を使ってくれないのが不便なんだけどね」

——ん？ 携帯を使わない？

雛田は何かひつかかるものを感じたが、それが何なのかは判らなかった。

ダッシュボードでは、コネクタに差し込まれた影松の携帯が充電中である。カバ松が舌なめずりしながら満足そうな表情で電気を食っている。

人間用の食料は、結城夫人が急いでこしらえてくれたおにぎりが後部座席に積んである。おかげでコンビ二のカメラに映ったりせずに済むわけだ。

「お客様、どちらまで？」

清香が妙にうきうきした声で訊ねる。

「そうだな……。おい、カバ松、お前はと思う？」

ピンクのカバは愛らしげに口を尖らせて見せた。

《フユウ~~~~ン、ウン》

〈第六章につづく〉